愛國婦人

創刊明治卅五年三月廿七日●明治卅五年三月廿七日第三種郵便物認可●毎月二回(五日廿日)發行●電話番町千七百四十五番●同五百廿番●遞送無料●振替貯金口座壹壹弐一番

May 20th. 1909.

明治四十二年五月廿日發行

●定價一部金三錢五厘●半年分金四十二錢●一年分金八十四錢●廣告料一行金六十錢●發行所東京麴町區牛ヶ淵公園内愛國婦人發行所●發行兼印刷人山澤俊夫●編輯者永持德一

社説

仁義

賄賂、公金消費、買收、家宅搜索、收監などの文字が、心中、駈落、身投、人殺し、などの文字と共に、新聞紙上に全盛を極め居る世の中に、「仁義」といふが如き見慣れぬ文字を、書き出す時勢後れもありなど笑はれんか知らねど、我等の如き前世紀の人間には、この仁義の二字こそは、有りがたく拜さるゝなれ。今こそ仁義の二字は、珍らしけれ、以前は中々持て囃され、行はれたるものにて、人間の魂命となり、居たるものなり。

抑も仁義とは何ぞや、仁は心の德、愛の理、義は心の制事の宜なりといふ。孟子より出でたりとか。平たく言はゞ思ひ遣りあり、人の爲めを計り、義理固く、正しき事を行ふことなり。即ち我利々々亡者の禁句にて、當世に流行らぬ所以なり。

當世の人間は、自分さへよければ、人が何うあらうか構ふものにあらず。自分に得がゆけば、人の頰を擲り飛ばす位の事は平氣にて、人の血を啜り、髓を嚙みても、身を肥やさんとあせり居るその有樣は、繪に見る地獄餓鬼どもの、一碗の飯を爭ふて攫み合ひをなせるに異ならず、淺ましとも、情なしとも言ひやうなし。嘗て人の葬にて、寺に行きし時、會葬せる近所の細民が、盆にうづたかく盛れる菓子の出づるを見るや、我れ先きに手を出して、風呂敷といはず、袂といはず、攫み入れて、見るまにその一箇をも留めざりし手際の早さと鮮やかさには、並み居る人々呆れて物も言へざりし事ありき。こは獨り細民のみならず、今の人間の心事を、有り體にさらけ出したるものなり人を見たらば泥坊と思へといふ語あるが如く、今の人間は、何れが泥坊やら、金着切りやら、收賄者やら、騙り者やら、分らず。身分も、肩書も、金鎖も一向當てにならず。

孟子曰く、上下交々利を征らば、國危からんと。今の勢で進んだらば、我國もこの先きが氣遣はるゝなり。

以上の事は、主として男子に就きての話なり。然らば女子には、一向かゝる事なきかといふに、殘念ながら、あり。今の婦人は、樂がしたい、めかしたいの一方にて、義理の念乏しく、辛棒氣なく犧牲心薄らぎたり。元は下女にても、主家思ひにて、忠實に働きたれども、今の下女は骨惜みにて、少し仕事をさすれば、それではやり切れぬとか言ひて、出て行くなり。此程知人の內にては、下女を傭はんとせしに、數ケ月の中に、產ありと聞きて、來る者なしとて、困り居たり。つまり、產があれば、用事殖へて面倒なるが故に、來るのを嫌ふなり、これは下女の心底にてまた、當世婦人の心底なり

今の婦人は、何でも朝寢好きで、樂な目をして、甘い物を食ふて、下女に打ち任して、遊び歩いて、姑が厄介で、子供が面倒で、家事が下手で、夫に强請ることが上手なり。固より、その反對の感心なる婦人も少なからざれども、かゝる婦人の多くあるこそ殘念なれ。若しかゝる心底の婦人が、母となりて子を敎育することゝならば、怠隨、ごまかしの上邊者の子が出來、務め向きにも、人の見ぬ所で、時間と勞力を惜ますして、人のため世のため、忠實に働く者居なくなり、進んでは、今日新聞を賑はしつゝあるが如き惡事をなす者を出すに至らば、實に婦人として、母としての面目はなかるべし近來不肖の子多きも、母の責は免れじ。今の出來上れる我利々々亡者は、致し方なしとするも、せめて未來の國民だけには、仁義が珍らしからぬやうしたく、それには婦人が自ら進んで、仁義を行ふて見せるが、最も有効なり。我等は古來、忍耐と犧牲心强きとを以て、誇りとせる我が國婦人の子孫たる今の婦人に、その實行を望むの、無理ならざるを信ずるものなり。

紹介

本月八日午後二時から帝國大學法醫學敎室で、第一回心理學通俗講話會が開かれまして、有益なる種々の講話が御座いました。その砌に在つた有益な、殊に御婦人方の御參考になる分を特に玆に御紹介することに致します。

着物の色合

文學士　菅原敎造

▲婦人の着物の色合　一般の日本の婦人が着る着物の色は、先づ紫と藍と鼠と茶の四種で、之が種々に變化して、上品になつたり意氣になつたりする。十五六の女で云ふと、濃い紫は上品に見え、藍は意氣に見え、緣はハイカラである。十九二十頃なら、上品なのは藤紫、意氣なのは藍鼠、緣はもう着られないから、薄藍などがハイカラである。廿四五になると上品なのは薄い藤鼠、意氣なのはお納戶の如きものを着る。それから以後の女の着物には、別にハイカラと云ふのはないが、其代り澁いものを着る樣になる。卅歲頃で云へば藍鼠は上品、藍藤鼠は意氣茶は澁い。卅四五になると、すべて色がくすんで鼠がゝつて來る。例へば鐵色は上品、茶鼠は意氣、澁いのは鼠茶だ。

▲色の表情　これに依て見ると、紫は上品で十四五から二十四五迄、藍は意氣で二十歲頃から三十歲頃まで着る。鼠になると、之は上品でもあり、意氣でもありそして壽命も長く、死ぬまで着られると同じやうに茶もお婆さんになるまで着られるが、之は廿七八頃からでないと似合はない。

▲光線と色　また色は光線に依つて大分變つて來る。例へば夜會服などは晝間見立てゝ拵へたのが、夜着て存外引き立たぬことなどは往々ある。之は光線と色の關係を研究しないからである。元來ランプや電燈の光は何れかと云へば樺色に近いから之と接近した赤い色だとか、又はオレンヂ白茶などは引つ立つが、藍などは黑くなつて終つて、全然駄目だ。若し之を見せやうとするには、餘程薄色にせねばならぬ。

▲愛讀諸姉へお願

一、前金切の方は何卒この際至急雜誌代御入金を願ひます

二、雜誌代御拂ひ込みの節、振替ならば登記料金二錢をお添へ下さいませ。

▲好きなもの嫌ひなもの▼

▲一週間の獻立▼

今度から新たに通信欄を設け第一に前記二題を募ります用紙は端書、締切は六月十五日。獻立は代金見積りをも記して下さい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論議

正義と罪惡に對する所感

伯爵　大隈重信

社會の進化が如何に劇甚となるとも、正義と罪惡が相並び立つと云ふ事は絶對に起るべき筈なしと云ふべしである。

▲最少の勢力、最大の報酬

近時財界の一部に、日糖不正重役の檢擧事件の起つたのを見ても事理明白爭ふべからずと思ふ。然しながら、經濟の原則とする正條には、僅少の勢力に對して最大の報酬を得よと云ふ事がある。これ即ち罪惡の原則とも云ふべきものだ。

維新前後に薩州が始めて贋金を造つたこれは銀地に鍍金した小判であつた。會津藩では銅地に鍍金し、筑前藩では勝手に太政官札を造つた。同じ贋せ物として筑前藩の遣り方が、惡い方面に於て奮ふて居る。これは今の世で所謂最少の勢力に對して最大の報酬を求めた次第である

▲舌三寸の資本

明治四十二年の今日となつては、更に惡い智惠が進んで來た。舌三寸の資本で數萬金を得る政治家を輩出して、牢獄は狹きを感じて居る。

然しながら正義の報酬は牢獄ではない罪惡の報酬即ち牢獄である彼等が罪の酬ひを感せざる無常識的狂愚に陷つて居つた故でもあらうか、社會の進歩は慥かに罪惡の仕方にまで進歩せしめたのである。善き石鹸と惡き石鹸との如きものゝ、判別にさへ、社會はその常識を失して居る。唯だ新聞や雜誌に廣告せられて居ると同じやうなものである。

▲正義と罪惡の分水嶺

斯の如く正義と罪惡との分水嶺は多少交錯して居るかも知れぬ程、不明の點はあれど、その出發點に於てのみ不明であつて、その到着點は非常なる反對を顯はすものである。

政略であるから政治を飜弄して善いと云へば賄賂を貪るも罪惡でないと、思ふたのであらう。

然しながら嚴然たる正義の判斷は、決して其不正を放任せないのである。天網恢々疎にして漏さずと云ふた諺の如く、是非一度は其罪を享しめねばならぬ、社會から放逐せらるべき筈のものである。

▲善と惡とは兩立せず

日本の石鹸業者が、正しき石鹸を造ると云ふ堅固不拔の精神があるとせば、不正なる石鹸は市場から驅逐せらるゝ運命に接するのであるが、一時の利にのみ重きを置きて居る間は、不正と知りつゝ粗惡なるものを平然として造つて居る。獨逸品や佛蘭西品に對抗すると云ふことは到底出來得ないのである。即ち其の石鹸の製品に精神的注意を加へない故であると思ふ。

これに反して、日本の製品は佛獨以上であると云ふ名聲を博する方法を取るならば、正しき道に根據を置いた結果として、當然市場に優勢になるのである。例へば獸脂を重なる原料となせば、善良なる石鹸となりて大に需用があつても、米利堅粉を加へ居るが如きものは、市場から驅逐せらるゝのである。善と惡とは決して兩立せないものである。正義と罪惡とは決して兩立せないものである。經濟の原則に從がふは、罪惡上の奸智である。正義の値は最大の勢に對する最少のものであつて、經濟の原則を轉倒したものである。正義の不平を抱くことは當然であるが、古今を通じ正義は滅失の恐れはないが罪惡は慥かに自滅するのである。孔子は生存中不遇であつたとは云へ、その德は赫々として今に及んで居るのではないか。されば、罪惡は決して試むべきものでは無い。

當代名家選

黑田清綱大人

千家尊福大人

宗教の及ぼす力

文學士　鈴木暢幸

日本の家庭には宗教と云ふものが甚しく排斥されて居るのでありますが、又一方では、何處の家にでも神や佛を祀つて居らぬ所は殆ど無いのであります。して見ると、その神佛は何の役に立つて居るのでありませうか。

私は佛教の耶蘇教のと限る譯ではありませぬが、人格の根底を支配し得ない樣な教なら神も佛も入りませぬ。私の望むのは深く温い教で、一家庭の御主人も奥樣も御子供衆も雇人も、凡て同一の大きな力を信じて其下に結合し、その力に生活する樣にあつて欲しいといふので御座ります。

その樣な家庭は如何に幸福な事でありませう。天國の。極樂のと云ふは即ち愛に表はれるのに他はあるまいと存じます。私の立場は勿論佛教でござりますが、今の各宗からは超絶して、前申した人道の主義を釋尊の御言葉から求めて實踐躬行するにあるので御座ります。

私の會には御婦人の方も大分御見えになりまして、種々の煩悶を御訴へになりますが、必ずこの偉大な力を御分ち申す他、全く私の了見を挿まぬ事にしてございます。

先頃、ある教育家の家庭に起つた事件について、御友達の方々が非常に御盡力なさつたけれども、何うしても解決が付かぬ結果、遂に私の會に御相談が參りましたから二回御話を申しました所、全く其の事が落着して、今では熱心な、温かな正義の家庭になられましたのです。決して私の力ちやありませぬ。無限絶待の力といふものは偉大なるものと、自分から感佩の他はありませぬ。人は赤誠の恭謙のと申しましても、絶待を信じての赤誠恭謙でない以上は、必ず何處にか驕慢の心が潜んで居るのであります。

絶待に依る力は偉大なもので、大人物も大家庭も、又は大文學も大美術も大事業も大冒險も、乃至は大國家世界の大平和、人類の本然に共通した絶待を憧憬れてその下に服從し、其指導せるまゝに奮鬪するといふ奥ゆかしき心からでなければ、出來ぬ事と信じて居ります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

黒死病と蚤に就いて

醫學博士　北里柴三郎

我國に黒死病の始めて來襲したのは、明治三十二年であつて、既に十年の歳月を經たが爲めに、研究上ペストの猛毒を殺減することの出來るやうになつたのは喜ぶべきことである。

▲鼠の蚤が媒介者

鼠がペストを傳播し、病毒の媒介を爲して居ることは、既に人の知れる處であるが、鼠の蚤が三年以前に於てペストと大關係あることを發見せられました以來ペスト流行の原因に就きまして、醫學上の學說が一變した。即ち鼠から鼠に傳播し、鼠から人に傳播するのは、鼠の蚤が其媒介者であると云ふことになりました橫濱や神戸等ハ外國航路船の去來する港灣には、印度鼠が非常に播殖して居ります。印度鼠の播殖と同時に、印度蚤も各種渡來し來り居りまして、大に播殖致して居ります。それ故。先頃日本橋で發見せられたる、ペストに罹りし有菌鼠は橫濱より來つた系統が明かになつて居りますから、其消毒方法も完然に行はれたる故。別に傳播は致しませなんだ。然しながら、蚤の最も多い時節となりましたから、隨つてペストも流行することは、毎年の例によりて明かでありますから、注意すべきことであります。

▲印度蚤が一番の媒介者

昨年八月兵庫縣下淡路國由良町で、ペストが流行致しましたが、研究上多大の利益がありました。即ち蚤が流行病の一大媒介者たることを確めたのです。

由良は神戸や兵庫と航通を頻繁に致して居りますから、病毒ハ系統が明かになりまして、外國船の鼠が神戸等に上陸し鼠の有する印度蚤が、鼠及び貨物等に竄入して、由良に襲來したと云ふ事實は、疑ひなき實證を得たので御座います。

蚤の種類は何百と澤山ありますけれども、外國航路によりて輸入せられたる印度蚤が最もペストを傳播するので御座います。それ故に防蚤設備は、實に必要なるものであります。のみならず、撲滅方法を實行することはペスト流行時代に殊更必要であります。

▲蚤の種類いろ〳〵

蚤の種類は種々あるが、それを玆に掲げて見れば

人　蚤　（學名ピユーレツクスイリタンス）
犬　蚤　（同上クテノセフアルス、カニス）
猫　蚤　（同上クテノセフアルス、フエリス）
普通の鼠蚤　（學名セラトフキールス、アニズス）
盲　蚤　（一名世界共通蚤、學名クテノプシルラムスクリー）
日本の鼠蚤の一種　（パラドクソプシルス、クルヒスヒヌス發見者、宮島醫學博士小泉氏兩氏）
歐洲普通鼠蚤　（セラトフキールス、フアスシアツス）
印度蚤　（ピユーレツクス、ケオピス）

でありますが、印度蚤は他の蚤よりも暴食でやたらに喰付いて血を吸ひますから小さな鼠などは、此蚤の爲めに非常に衰弱致します。

▲印度蚤とペスト

昨年由良港で調査せし蚤の大部分は人から人蚤、猫から猫蚤を多く獲られましたが、鼠から獲られた全數の四六パーセント、即ち約半數は印度蚤でありました

モルモットを人家に放ち置きて付着した蚤を見ると二百六十五匹の中二百三十九匹まで印度蚤でありました。斯の如き印度蚤の發見は、日本で始めてであります。元來、印度蚤は、印度を初め熱帶地方には廣く分布して居る種類でありますが、歐羅巴では殆んど居りませぬ。

昨年十一月ペストの流行した土地を調査した處、神戸では十二パーセント、東京では三十五パーセント、橫濱では四十五パーセントの印度蚤を發見致しました印度、南淸地方等を經て橫濱に入港した外國船から鼠を取つて、其の蚤を檢査すると、悉く印度蚤でありました。が、印度蚤はペストの流行しない土地には發見することが出來ませぬ。

▲猫は甚だ危險ならず

兎に角、日本に於ては印度蚤が鼠と共に外國航路の船舶に乘つて來て、ペストを傳播することでありますから、貿易港灣に住せらるゝ人々等を始め、其貿易港の貨物を出入する各都市邑は大に警戒する必要があります。

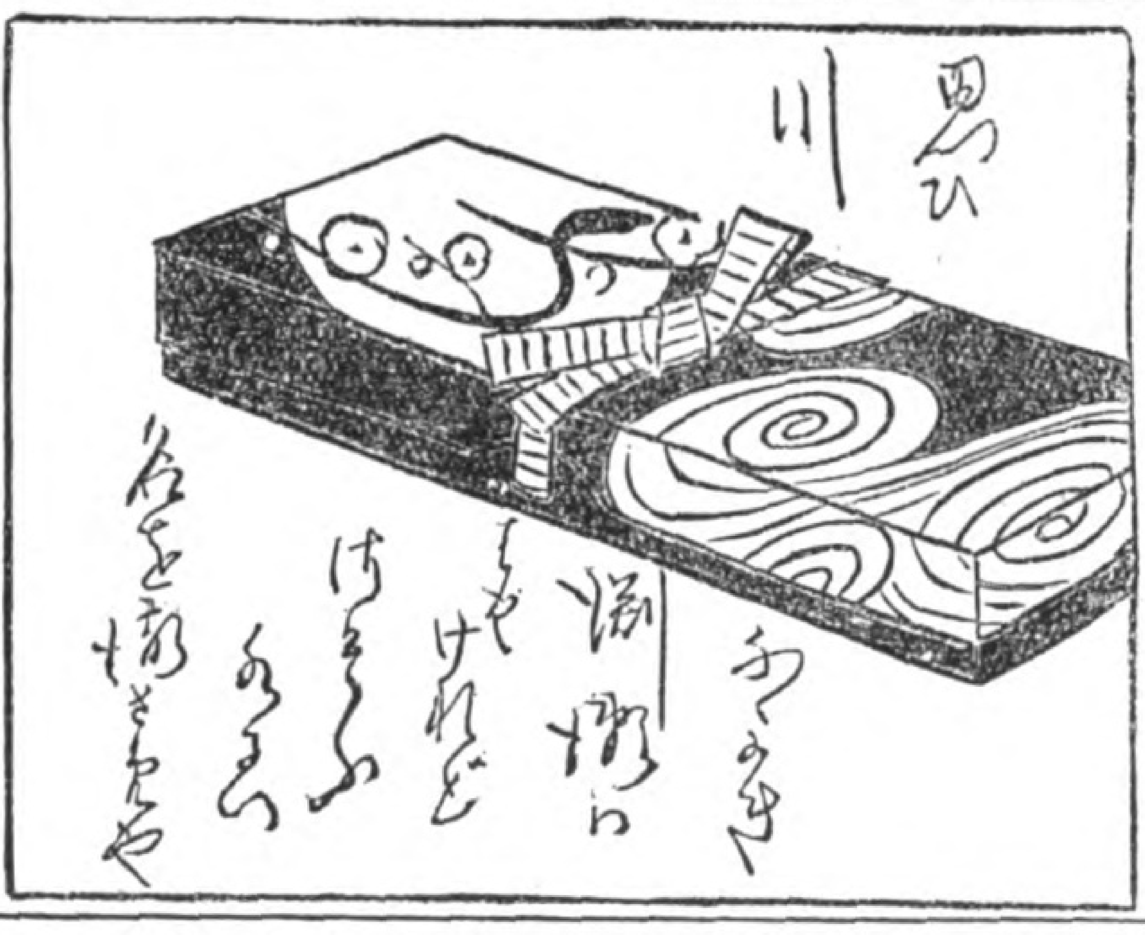
猫の胃腑はペスト菌に抵抗する免疫性に富んで居りますから、猫をして鼠を驅除せしむる事は決して危險でありませぬ即ち猫から人に傳染することは殆んど御座いませぬ。

家庭

古今名婦譚（五）　鶯所

思ひ川

永祿の頃、伏見の里に住める、奈良左近義成といふは、母と妹とありて、三人いと睦ましく暮らしけるが、妹は容儀世にすぐれ、心ざまもかひ〳〵しく、和歌の道にも志して、手など善く書きたりしに、兄の左近は、都の西の岡に、貞光久左衛門尉といふ笛の上手のありけるに通ひて、笛ふく事を習ひけるが、年頃經にければ、互に打とけて内外なく入りわたりぬ、或時貞光伏見に來りて、左近が妹を見染め、限りなく愛で迷ひて、左近に對ひ、其許の妹君をば我に得させよ、左すれば今の妻をば去りて此人と世を涯りに暮らすべしと言ひければ、左近思ひも寄らぬ事を承はるもの哉、今の御方を去り給へ吾が妹まひらすべしとは、武士の道に外れたる事なれば、得こそ申まじけれと、事もなげに打笑ひつゝ過ぎぬ、貞光なほ如何にもして、斯を得まほしと、心かけて、いよ〳〵左近が許え行き通ひて、嬌治きわたりけり、されど左近はさりげ無く待遇して、只管笛を習ひて、師弟の禮を違へず年月を經るほどに、左近其母に謀りて、妹をば野村越中守と云ふ者に許嫁たり、其頃義昭將軍は織田信長卿に輔け立られて、六條本國寺におはしけるが、永祿十二年の春三好が餘黨京に入りて、本國寺を攻む、將軍方の兵士ども防ぎ戰ひける、此時左近は寄手の中にありけるが、寄手打負けて散り〳〵に落



行きける、時に左近寺のほとりにて好き武者と組打して目立たしき働きはしつれども、引立ちたる負け戰爭なれば、續きて働く事も叶はず、東寺の方を指して退きけるを、貞光此戰に出あひ、折を得て左近を討たばやと思ひければ、追ひかけて彼は左近なるか、きたなくも逃ぐるよな、回へせと言ふに、いと思ひかけぬ敵ながら、返し合せて戰かはむとする處に武士十騎ばかり貞光に續きて追ひ來る、其中より射ける矢にて、左近を射倒しけり、貞光はしり寄りて首取らむとしければ、左近伏しながら振り拂ひける刀にて貞光膝を薙がれて引き退く、別の武士出で來りて遂に左近が首とりぬ、之れを見ける人々、貞光が所業人ならぬ振舞かなと、皆な指彈して嘲り惡みけり、されど貞光は愧かしと思へる氣色だになくて、左近が伏見の家に押し入りて、彼の妹を奪ひ取りて還へり、傍なる小屋に入れ置きけり、妹は何とて不義には從がふまじき志しある上に、眞しき兄の仇なれば、身を棄てゝ彼を殺さばやと思ひ定めけりされど色には更らに出さず、彼の家に落付きて貞光に言ひけるは、妾このほと、緣を定めたる野村越中守も左近と共に討たれしと聞く、今は世に恃む蔭なき身となりぬれば、君と契りて身を終へなむも前きの世の緣なるべし、只心に掛かるは里の母がさぞや思ひ煩らふべし、書簡ひとつ贈らむと思へば屆けさせて給へとて硯を乞ひて書簡かき、竊かに鬢の髮すこし斷りて卷き添へて遣る、貞光喜びて急ぎ伏見へ持たせ遣はしけり、母書簡を展きて見れば、とり〳〵哀れなる事ども書きつゞけて、殊には野村どのと未だ一目もまみえざるに討たれ給へる悲しさ、まして兄には離れ、母を殘して先立つ不孝の罪など侘び、一方ならぬ悲歎を細々と書きて其のおくに

思ひ川ふかき淵瀨はやけれど
　誘ふ水には名をなかさめや

母これを見て限りなく悲しみ、伏し沈みて泣きけるが、孤り永らふまじくや思ひけむ、使の見る處にて刀をぬき自害して死したり。使の者驚きて走り還りける、其間に貞光は女を得たるが嬉しさに打咲みて、何心なく戲れ寄りけるを、妹飛び掛りて貞光が腰刀を拔取りて容易くさし殺し、其刀にて自から腹かき切りて死したり、女の腹切りけるは例し稀なる事にて、貞心勇氣たぐひ無き者を、斯く徒らになしつる事よと、歎き惜まざる人もなかりしとぞ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

話の種

ひつじ

一　珍妙な書置

昔某藩の御代官の家に年久しく奉公して居た一人の若黨があつた。至つての好人物で、苟且にも嘘を吐かない。曲つた事は大の嫌ひといふ、一風異つた人間であつたが、ある日突然家出して行衞不明となつた。家人は不思議に思つて方々探した揚句左の如き一通の遺書を發見した

拙者儀隣家の下婢に色慾を問はれければ固辭して去る。而かも再三問ふあらば後災ともなるべきか。仍て出奔仕候御高恩は追つて報ゐ申すべき事。一札如件。

「隣家の下婢に色慾を問はれ、固辭して去る」が振つて居るではないか。惜しいかな、今その名を逸した。

二　小父さんの鼻が燃てる

愛ちやんのお父樣、お母樣は大の煙草嫌ひであるから、家中誰一人煙草を喫む者がない。處がある時、他家の小父さんが來て、頻りに卷煙草を吸つては鼻から煙を出して居るから愛ちやんは驚いた。可愛い眼を一杯に睜つて

「あの母樣！　あの小父さんのお鼻が燃えて居りますよ！」

お伽小説　妖魔の森

神谷つくば

（十）　花の露の奇効

怪物の容子を見て居る中に、末子は悧發な娘ですから、怪物が近頃病氣に掛つて居る事を悟りました。それは怪物の寢息が熱臭いのと、毛だらけな手足が非常に水腫れになつて居るからであります。

而し見廻した處が薬らしい物もありませんが、只怪物の床の邊に、澤山散らばつてるものがあります。夫は彼の美しい香の佳い花でムいます。怪物は時々寢返りを打つては、彼の花の露を吸つて居ります。それを見た末子は、優しくも先程の花園に行つて澤山折つて參り、白魚のやうな可愛い手づから、一つ一つ花の露を絞つて、コップに一杯作りました。

丁度その時怪物は目を醒したので、夫を勸めると、怪物は一息に飲みました。すると不思議にも怪物の姿は、若い美しい青年となつたので、流石の末子も大層驚きましたが、青年は欣し相な聲で『姫よ驚き給ふな。自分は怪しき者ならず、先年妖魔の爲に囚はれの身となりし西の國の皇太子なるが、今日御身の爲に計ずも再び世に出る事となれり』とて妖魔の爲に姿を變させられた事から若し清淨な處女の手から、彼の花の露を飲ませて貰へたら、舊の通り人間になれると妖魔の云つた事などを語り、約束を守つた末子の信義を大層喜びました。

西の國の皇太子は直ぐに夫から妖魔の處に參つて之を征伐しました。

之を聞いた老貴族並びに西の國の王樣は非常に喜んで、直ぐに皇太子を御迎へになりました。申す迄もなく末子は皇太子妃殿下となりました。

森の城にあつた妖魔の財產は、到底數へ切れぬ程澤山ムいましたが、之は凡て希臘及西の國の貧しい人達に分けて遣はしたと云ふ事です。めでたし。

造花之栞

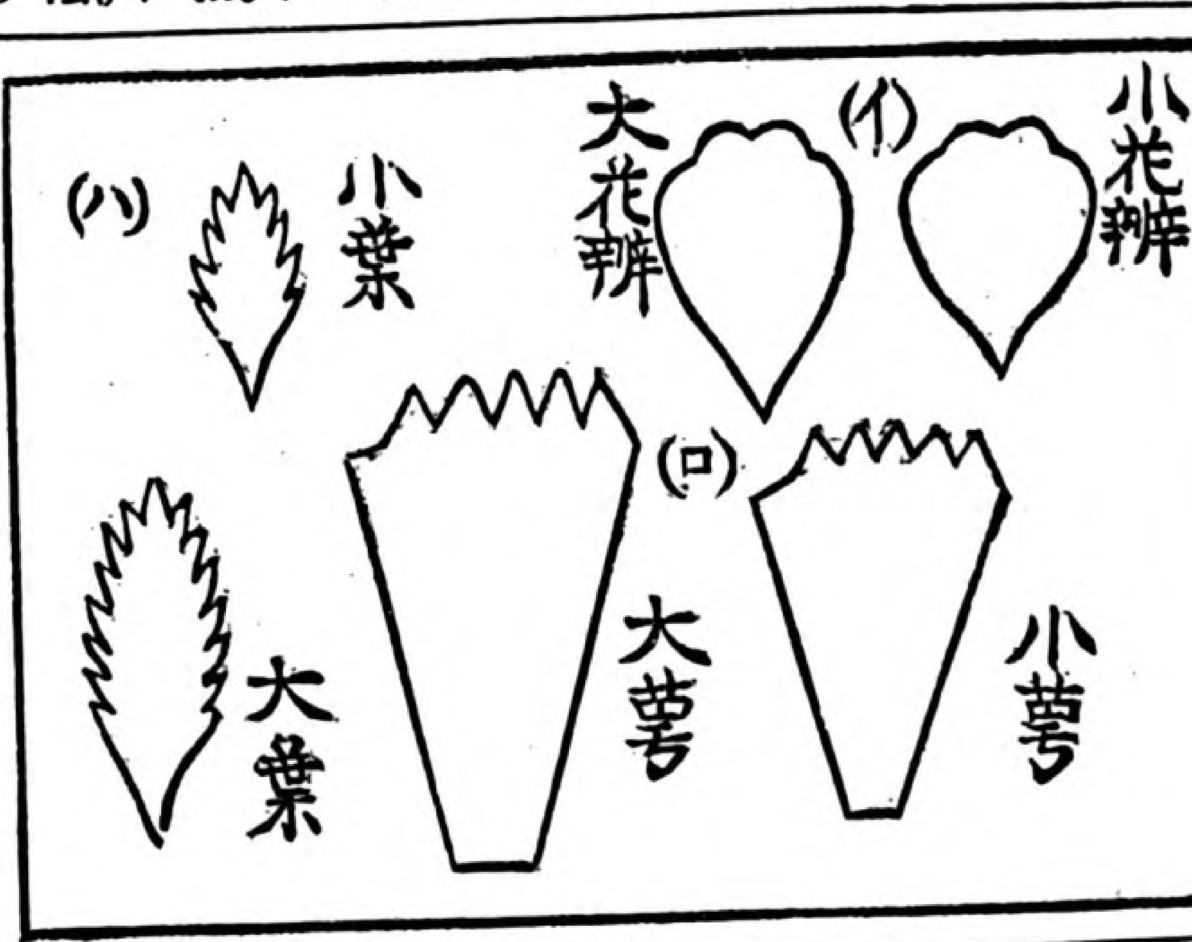
田村しな子

桃花

梅は紅なれば此度は白桃を述べむ。圖(イ)の如く寒冷紗を以て大瓣百五十枚、小瓣七十五枚を切り、グリーンとオーラミン(造花用染料)を混合して熱湯にて溶き置き、前の花瓣の五六枚重なりしまゝ、水に浸して放たず、其まゝ取り上げ輕く指にて絞り、前の液にて花瓣の尖端を極く僅かばかり淡緑に染め反古の上に出し陰にて干すべし。干きて後ち瓣鏝を火にあたゝめて、大小とも濕り氣の心持ち殘り居る頃を見はからひ四五枚づゝ鏝を當つ。小瓣は大瓣より深く當つるなり。大小瓣とも花瓣の上方の少し縮むやうになすべし。萼は第二圖(ロ)の如く、青半紙(材料店にあり)を以て大四十枚小二十五枚をたちて、丸箸の一端を程よく削り、前にたちし萼の一枚を取りて、其箸の削りし箇所に三角數尖端の方を卷きつけ、其側方のかゝりに少し糊を附けて張りつく大小とも皆右樣になし、干きて後更にまた前の丸箸の削りし箇所に冠らせて、下部の内面に糊を淡く指にてぬり、其箸を左手に持ち、右手にて萼をひねりつゝ右手の方に少々引つ張りつゝ伸してひねるなり。

箸の夫れを取り、また他の萼を冠らせて、前同樣の方法にて大小共作るべし。

之れの干きて後、梅花の萼と同じく糊板の上に開きて並べ、そを取り上げて開花は、大瓣五枚づゝ二廻りつく、半開はたゞ小瓣三枚を取り附けて輕く手にて蕾ますべし。蕋は梅の蕋を開花にも半開にも附すべし。



蕾は寒冷紗を白きまゝにて、七八分の眞四角に切り其中央を鹿の子の如く糸もて括り表に返し、綿を入れて圓く括り其端を捨つ。花と同じく萼をつく、大小合せて二十五個位にてよし、

葉は圖(ハ)の形に青半紙にて大三十五枚小二十五枚を切り、手拭を水にて絞り、其上に半紙を敷き、其上に葉を一枚づゝ並べて、少々濕らし三四枚重ねて、長く二つ折になし、布片も二つ折になし其ワサの所と葉の折り目とをよく合せて挾み机の端に左手にて布片を固くおさへ、右手にて其布片をズーと手前の方に强く引つ張るべし。後布を取り退け葉に皺の出來あればよし。

仕上法　葉は大小取り交せ五六枚組みて鐵の針金の先に括りつく。針金はよくのばし、肥後竹と共に心に入れ、組みし葉を頭にして花蕾を程よく取り合せ、青美濃紙に極く淡くセルリンとカシユトラバル（二者とも染料）を筆樣のものにて敷き、干きて三四分の巾にたち、固く卷きつくればよし。かくまとまりなば、白蠟（材料店にあり）を小鍋にて火にあたゝめ溶けし時、筆につけて手早く花を汚さぬ樣注意して、葉のみにつく、これにて全く出來上りしなり。

俳句と女性

伊藤楊花

俳諧の最も盛んに行はれた全盛時代とも言ふべき時は延寶の頃から正德に至る迄大約四十年間を指すのである。西洋の或る學者もナポレオン時代の佛人は皆な小ナポレオンだと言つた。所詮一個の英勇豪傑が出れば世界の人が皆其風化を蒙ると云ふので文學に於ても之れと同樣の風潮を見るのである。であるから、芭蕉が正風の俳諧を開いてからと言ふものは、榮枯盛衰の感は皆其詠に上つて天下到る所に俳諧よみの聲を聞く樣になつた。で勢ひその影況は女子社會にも及んで、當時女で俳諧をよくするものは實に數へ切れない程て、其詠み出した句も溫柔、婉和、一種の情趣を含んで人を惱殺する點に於ては男子の句よりも强い力を有つて居た。

其頃女流中、俳諧で有名なのは美津、捨子、園女、槍風尼、智月尼、秋色女、千代女等で其内最も優秀なのは園女と千代女であつた。昔平安朝の頃には紫式部、清少納言と云つた二人の女流文學者があつて、其名は日本文學者中で嘖々として居たものである、けれ共二人の性格を比べて見ると各々異つて式部の方は溫柔、淑艷の女で其文も誠にすら〳〵としとやかであつたが納言はこれとは全然違ひ活溌で奇才に富むと言つた人、そして文章も女流作者には似ず强健で寸鐵人を殺すと言つたやうな文章を書いた。

で竝に園女と千代女との二人の性格を見るに恰度紫式部、清少納言の兩君に頗る酷似した所がある、園女の不覊にして奇才ある點は淸少納言の如く、又千代女の緻密にして濃厚なる點は之れ又よく紫式部に似て居る。が併し是は單に性質上のみの事で俳諧の上に於ては二君とも常に女子の溫厚を失つた事はない。この頃又西島某と云ふ人の女房で名高い俳人がある。此人はある雪の夜に夏人の召使ひの者を從れて外出しようとした時に、

我子なら供にはやらじ夜の雪

を唄つて夫を感服さしたと言ふ、要するに此時代の女性には男子をも凌ぎし俳者も偶々あつたのである

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家事問答

此締切は毎月十日と致します

今回から斯ふ云ふ欄を設けました。家事に關することでお聞き合せになることがあれば、何事でもお答へ致します。用紙は端書、成るべく簡單に御質問の要點を認して戴きたふ御座います。

問　赤兒の牛乳　生れたての赤兒に牛乳を與へるのは何うすれば宜しきか（山口　若き母）

答　生後一个月の赤さんには牛乳一、温湯三、二ヶ月目からは牛乳一、温湯二、三ヶ月目からは牛乳と温湯と半々、四ヶ月目からは牛乳を温湯の倍、五ヶ月目からは三倍、六ヶ月目からは五倍七ヶ月目からは七倍と云ふ割合に混ぜて與へます八ヶ月後は牛乳の儘でよろし、併しよく沸して用ふべし、砂糖を入るゝこと多きに過ぐれば胃を損ふ虞れあり。

問　ウヤミの製法　クリームとウヤミとは何うして製すべきか（四谷　婦人愛讀者）

答　次號でお答へ致します。

問　結婚の年齢　最下限は何歳なりや（とめ女）

答　我國民法上の結婚年齢の最下限は、男子は滿十七歳女子は滿十五歳なり。各國の結婚年齢を見るに男は十八歳より十四歳、女は十六歳より十二歳までいろ／＼あり。男女其差の最も多きは四歳（獨逸）にして最も少きは零歳（墺地利帝國）なり

譚議　恐しい二つの流

夢の世界と實際の世界、この二つの區別は子供の時分には仲々區別の出來ないことがある。實際の世界を夢、夢の世界を實際の世界と思ひ誤るやうなことは、兎角、子供に在りうちのことです。

併し子供でなくても、維新の餘程前に生れた七八十歳以上の方々になると、維新前後の何れが實際で、何れが夢のやうな昔の記臆であつたか殆んど判斷に苦しまれるやうなことに出遇はるゝことであらうと思ふ。

▲恐しきは時の流

恐しきは時の流れであります。要之、時の流が種々に流れ／＼て居るうちに種々の變遷があるのであります。殊に云ふも古めかしいが維新前後の時の流れと云ふものは仲々激しかつた。激しく早い時の流れのうちに種々な事實が卷き込まれたのであります。

就中、この間に於ける思想の變遷は仲々烈しかつた。ですから、唯今の處、舊い古風な保守の思想と、新しい生々した但し未だ半熟な進歩した思想とが、兎角に甚だしい差をなして居ります。總じて何時の世にも

▲進歩と保守の二の流

があつて、互に甚だしき相違をなし、互に激しき爭ひをしては居りする者の此二十世紀の今日に於ける程、我國は勿論、世界全體として、保守と進歩、古風と當世風とが激しい爭ひをして居つた時はありませなんだ。

それに伴つて、我國の女子教育家のうちにも古風と當世風の二種があり、教育の實際に於ても此二種になつて居り、または折衷されて居ります。かゝる時下手に新しい教育を受けても大變なことになりませうし、また下手に古風な窮屈な教を染みこましても困つたことにならぬとは申されません。

▲米國で女子教育の三派

我國の對岸、米國は大層進歩した、或る人に云はすれば寧ろ進歩過ぎた國のやうに云はれて居りますが、此國では目下女子教育の目的が四様に岐れて、論せられて居るさうです。

一、男女同等に教育すべしとの主張
二、男女教育を異にすべしとの主張
三、前記二派を折衷すべしとの主張

ずつと進歩過ぎた云ひ方ではありますが我國にも進歩保守及び折衷の三派があるのと鳥渡似通つて居ります。

この恐しい二つの流れに卷き込れ卷き出されながら教育されて居る今時の若き御婦人方。餘程御注意が肝要ですぞ。

講談　鳥居強右衛門（五）

大島光利口演

心は矢竹に早れども凡夫の悲しさ、身體疲れ歩行も自由ならざれば、暫し憩ひし折も折、御主君の大殿樣之へ御通行遊ばすは、所謂天の助けなり何卒此由申上げ、宜に御取計ひ下さるべし」と云ひ終つて頭を下れば、兵は立歸つて、馬上の貞能公へ申上る。

貞能公馬上よりヒラリと飛下り、偖は吾兒の危急存亡、その危險を侵して來りしとは、吾兒の爲には再生の恩人と、謝するは所謂私事、大事の前の小事なりと強右衛門の傍に來たり、二言三言その勞を犒ひ、忽ち岡崎城内へ同道なし、徳川三河守公へ申上る、委細聞れて家康公は床机にかゝりて軍扇を膝に突き、家「ウン貞能氣遣ひ無用ぞ、予は織田信長殿に後詰を頼み入れたるに、其方を使者に立てしは仔細あり、最愛の伜仙千代を見殺にしても暴逆の四郎勝頼に背く、况や其方の伜九八郎は勇悍類なく、敵何萬來たるとも、更に動する色を見せず、長篠城に立籠りしは武道の花とや稱へ申さん、故に其方を織田殿に使節に立てたるは、信長殿に早く玆に心づかれるやう、故に取計ひし吾が計略、功を奏する時も時、長篠よりの密使來たるは大吉、之れ誠に大勝利の瑞祥なり、宜く勞を犒ひ休息せしめよ」と、て、直ちに信長に面會し、其出陣を賀し、又諸將に向つては遠征の勞を謝し、強右衛門の事を遺漏もなく物語れば猛り切つたる勇士の面々、憎くき敵の振舞かな、直に長篠へ馳參じ勝頼の首を擧げて置べきか、と強右衛門力足を踏で美作守に向ひ强「はや御暇を賜はるべし一刻も早く後詰の儀くれ／＼願ひ奉る」云へば貞能首肯きつゝ美作「遲くも明日當地を發し、三日の裡には後詰として、三萬以上の大軍武田の後に取詰れば、此儀安心いたすべし、汝の精忠忘れは置かぬ、また長篠城に入る事は最も危き行爲なれば此岡崎城に止りて、援軍進むその時に驥尾に屬して進まれよ（以下次號）

子どもの研究

▲子供は此世の神である　山上憶良といへる、名高い詩人が

白がねもこがねも玉も何せむに
まされるたから子にしかめやも

と歌つたやうに、子供ほど世に愛せられ珍重がらるゝ者はない。詩人は其蕾のやうな、愛らしい唇に無邪氣な歌など、聲はりあげて歌ひあるく樣をば、鶯が梅に囀り、蝶が菜の花に舞ひ遊べる、のどかなる春の景色とも見。畫家は其紅ひ匂ふ花の顏に愛の光りを輝かせる、肥え太りたる福ぶくしい姿を描きては此世の神になぞらへ、天にも昇り得るやうに、二つの翼さへ附け加ふるやうになつた。

▲子供の研究は人氣がある　子供の此樣な純潔な性質と、天眞爛熳たる動作とは遂に世の人を引つけて、これを研究しやうとの望みを惹き起さしめ「兒童心理學」といへる一つの學問となりて、盛んに研究せられ「學問の中で子供の研究程人氣の好いものは外にない」とまで叫ばしめた。この子供に就ての研究の本は世の中に種々ありますが

▲新しき子供研究の本　として最近に實業の日本社から出た「子どもの研究」と云ふ本は有益で面白く子供のことを書いたものでありまして、總頁二百六十頁ばかりで正價七十錢であります。世の御婦人方に此本を敢えて此處に御紹介致します。

家庭教師志望

中等教育に多年の經驗を有し目下東京に在りて文筆に從事し居れる者にて業務の餘暇家庭教師たらんことを望む
御用の御方は當愛國婦人發行所宛若くは九段郵便局私書函第三號宛御照會を乞ふ

白毛赤毛染として製品の最も成功して居るは千代ぬれ羽白毛染であり升マア東西を通じて千代ぬれ羽のような品物はないと申してもよいかと思はれますこう申した處で御存知でないお方はおわかりになりますまいけれ共一體白毛染なぞは安全に染められて染める時に手數なく能く染まるのがよいとしてありますそこで千代ぬれ羽をためしますと手輕に能く染り又誠に安全でそして世間有りふれたる白髪染と違ひ長く保ちまして自然の髪の毛と同じ樣に美しくなります

近頃世間では隨分粗惡の白毛染を製造して外國製品とか何々學士の證明とか誇大の廣告をして販賣する向きも往々ありますが種々試しますのに千代ぬれ羽が一番よいと思ひますから白毛赤毛をお厭ひの方々は先づ御近所の小間物化粧品店或は藥店に就て東京服部松榮堂製千代ぬれ羽と申されてお買ひ求めをお勸め致ます

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

雜報

表慶館の開館

東宮御慶事紀念として東京市民の獻納した上野へ建設の美術館も、皇孫殿下が御二方誕生せられ、一の宮が初等第二年級に進まれた此十年越しに、工事愈々竣へて此程開館の運びに至つたのは洵に喜ばしい次第で、市民の赤き熱誠が此白い石造の建築に結晶して、永久に傳はるのかと思ふと何とも云へぬ感に打たれる、兎にも角にる表慶館の開館は大に喜しいことです

東宮御所の御養蠶

東宮妃殿下の御思召に依り昨年御養蠶あらせられしが、本年もまた御飼育遊ばさるゝ御趣旨にて、豫て御選種あらせられ蠶業講習所に於て貯蠶方を承はりたる、小石丸二十八蛾付五枚と共に、青熟小石丸、各三枚、伊、佛産黄繭種數蛾を進納すべき旨の御沙汰に接し、本多講習所長は去る廿九日原種を進級し、三十日掃立を濟ませられ、御蠶事主任は有泉善三氏承り、講習所助手四名を伴ひ參上せり、殊に今回黄繭種御飼育は伊、佛兩國は世界蠶糸業上の先進國なるを以て、兩國の原種により、御試育遊ばさるべき御思召に由れる次第なりと云ふ

兩殿下の御婚儀

風薫る初夏の去月廿九日北白川宮成久王殿下と周宮房子内親王殿下との御婚儀は若葉の緑り滴る大内山の賢所大御前に於て午前十時最莊嚴に行はせられまして、ついで幾日の間が處々で盛んなる御披露の御宴が催されましたが、更に近く東京御出發御成婚御報告の爲め伊勢太廟、畝傍御陵御參拜あり、夫れより京都へ成らせられ泉山御陵御參拜の上御歸京あらせらるゝと云ふことで御座います、竹の園生のいやが上なる御榮へ幾千代かけて御祝ひ申上ぐるもの國民をこぞりてのことは申すまでも御座いませぬ

東伏見宮邸の婦人會

月の一日午後一時から赤坂葵町なる東伏見宮御邸で大日本婦人衞生會は春季總會を開催されました。會場は長閑なる御庭に面した菊の間、葡萄の間の二室を打ち開いたもので一般の會員は葡萄の間に、總裁東伏見宮妃殿下には白地の御洋服を召され、會長鍋島公爵夫人御先導申上げ御氣色麗はしく菊の間の御座に臨ませられました式は鍋島會長の御挨拶に始まり諸務の報告で終了を告げ直ぐに餘興に移りましたが婦人會として一層氣のきいたもので優しき嬉しき會合であつたさうです

和蘭の慶事

去四月末和蘭皇室に於ては御慶事がありウイルヘルミナ女皇には玉の如き皇女を御擧げ遊ばされ御母子共至つて御壯健に渡らせらるゝと云ふことで御座います。承はる處に依ば皇女は至つて豊かに美しき御面ざしに渡らせられジユリア　ルーズ　インマ　マリー　ウイルヘルミナと御命名があつたそうです。和蘭皇室では過る二十九年間、嘗て御慶事と云ふものがあらせられなかつたのであります。然るに二十九年目に此御慶事があつたのですから、皇室を初め國民の喜びが如何ばかりであつたかは殆んど想像は出來ません

篤志看護婦人會

同會の總會は去九日午後一時より會長鍋島侯爵夫人邸にて第四回總會並びに第九回修業證書授與式を擧行せり出席者は上京中の各知事各支部常務幹事及び毛利公母堂を始め會員三百餘名にして、定刻に至り總裁閑院宮妃殿下御代理として東伏見宮妃周子殿下台臨ありて總裁宮殿下の御諭旨を御代讀あらせられ之に對し鍋島會長の奉答文朗讀あり畢て平山專務幹事は會務の報告をなし次で小澤赤十字副社長祝松方社長の祝辭を代讀し次に來賓の祝辭あり夫より鍋島會長は今泉スヽ以下四十一名(外國人一名)に修業證書を授與し之にて式終り暫時休憩の後ち一同整列撮影をなし茶菓を饗應して餘興に入り海老一の大神樂及び桃川若燕の講談等ありしと

花蹊女史の光榮

豫報の如く跡見花蹊女史古稀の祝賀會を兼ね跡見女學校創立三十五年祝賀會は九日午後一時日本橋倶樂部にて催されたり定刻本校生徒は閑院宮妃殿下御詠の紀念唱歌を奏し次いで千家男の開會の辭校長花蹊女史の式辭大和田建樹氏三宅花圃女史澁澤男(角田眞平氏代讀)等の祝辭ありて堀田伯夫人伴子は校長へ紀念品贈呈の事ありそれより來賓大隈伯の祝辭的演説ありたる後九條公爵の發聲にて花蹊女史萬歳を唱へて其處此處の摸擬店を開きたり當日の餘興には山姥を越英之助猩々を三井得右衞門氏が演じたるが三井氏の猩々姿の衣裳の立派なる來賓一同を驚かしたり猶吉住小三郎一派の長唄賤機に耳を傾けて李彩の手品藤間政彌の踊を見て五時散會したるが此日閑院宮恭子茂子季子の三女王殿下は何れも綿服揃の他生徒と同一の御扮裝にて御臨場あり何呉れとなく他生徒と共に恩師花蹊女史の爲めに盡されしには來賓皆感涙に咽びたり

季節向流行の御婦人洋傘

神田一ツ橋通町山田洋傘店は卅餘年間其の業に從事しつゝある屈指の老舖で既に貴婦人大家の御用を蒙る事年久く品の堅きは現在好評を博しつゝあるのであるが本年は今一層勉勵して流行品の卒先者たらんとの意氣込にて大車輪大勉强する由御用の節は電話か葉書で御一報次第早速品を御屆します又御進物には商品切手が御便利なりと云ふ電話は本局二三五三番なりと

新女大學

青年男女の腐敗墮落は其極に達し確實なる女學校に通ふ妙齡の女子にして尙ほ且つ醜聞を傳へ一生浮む瀨もなき境遇に居るもの漸く多きを加ふるは一面社會の罪に歸すべきも又一面自衞の途足らざるに因るべしとて女子敎育家の團體にては次の如く青年女子の男子に對する心得に就立案せり

一、青年男女は密室内にて對談す可からず若し止むを得ざる場合には必ず第三者の同席を要す
二、青年　男子を訪問す可からず
三、父兄の外は何人たりとも適當なる保護者なくして單獨に宿泊する男子を訪問す可からず
四、青年男子と文通す可からず但し文通をなす必要ある時は適當なる人を通じて爲すべく又未知の人より文書を受けたる時は自ら開封す可からず
五、青年男子と寫眞其他の物品を贈答す可からず
六、自己の寢室又は病室に於て男子と面接す可からず
七、日沒後は成る可く外出す可からず但し止むを得ずして外出する場合には年長者なる保護者の同伴を要す
八、責任ある保護者なくして旅行外泊すべからず
九、確實なる婦人の保護者を有する親戚又は知人の家庭の外單身にて寄宿す可からず
一〇、男子に對しては特に言語擧動を愼み苟も野鄙の振舞ある可からず
一一、確實なる紹介なくして男子と談話し又は其世話を受くべからず
一二、誤解を招き或は間違を生ずべき恐ある人又は場所に近づく可からず
一三、年長の保護者なくして青年の男女が互に散歩遊戲、娛樂等をなすべからず
一四、青年男子の旅行を送迎す可からず
一五、他人の目前に於て衣類の着脱をなす可からず

一森式座椅子の評判

寢臺ともなり椅子ともなり疊込めば、平面體ともなる便利調法この上なき椅子なれば、老人や産婦には御誂への品なるべし、その上見た處も、高尙なれば、旅行などに携へても見苦しからず、悉しくは本誌廣告欄にあり(芝區高輪町廿一電話三〇六五番樂民堂)

手拭中形は例年以上に本年の最新形種々着荷致し候

めりんす友染でおなじみの日本橋區人形町通り赤のれんおばなや本店今年のおゆかた地は有名なる竺仙染を始め總て粹き向新柄澤山取揃へ申候間一應御遊び旁々御來駕の程奉待上候御用の節は電話浪花四三四五番へ願升

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

和歌

——(初夏雜詠)——

佐々木信綱選評

天　下野　瀧澤秀子

雨あかり青葉若葉に雫して燈影ほのめく初夏の村

評、初夏の趣をよくうたひ出られたり、但四句原作夕燈とあり、おもしろからぬをもて改めつ。

地　京都　露緒子

野茨ちる里曲はづれをあるゆふべと行きかく行き歌もえなくに

評、里わはづれの句、あなぐりいはゞ難あるべけれど、着想清新なるをもて地に選びいでぬ。

人　越後　松永繁子

形よき色よき石を積みあげて箱庭つくる春雨の朝

評、可憐なる作者の心ばへもおもはれてなつかしき歌。

軸

春野　佐々木信綱

我世たのし身は若草の野にありて心はあそぶ常春の國

新墾の歌の廣野の若草の花さく春になりにけらずや

秀逸

櫻ちるゆふべ月に添ひ佇めばいつこなるらん笛の音きこゆ　東京　宇佐美こま子

とふ人のなきいほなれとそよ〳〵と青葉にわたるかぜはありけり　横濱　鈴木まつ子

おぼろ夜の月に向ひてたゝずめはいとゞなつかし古里の空　大分　桂木靜子

思ふとち野邊の霞をくみながらまとゐする日はたのしかりけり　東京　林寄久

くひななき卯の花さきて山里もなかめ涼しき夏は來にけり　岡山　西村長子

春きぬと谷の戸いでし鶯のまだ里なれぬこゑもめづらし　岡山　山崎露子

鳥うたひ蝶まふ野邊の春の野にわかな摘みつゝあそぶ里の子　茨城　衣笠きく子

咲き出でむ花をまつまのきのふけふのとかにくもる雨も嬉しき　美作　八木濟子

夕月は若葉のひまに匂ひ出てぬ歌まとゐにといほないづれば　岡山　横川明子

叔母君の御墓詣での歸り路杉村高く鳴く杜鵑　宮城　夏川あづま

さく花に心おかれし風さへもまたるゝ夏となりにけるかな　長門　蔦田冨子

春はなほ深山のおくにのこりけり青葉がくれにうぐひすのなく　山口　末田竹子

花の香になれし衣をぬきかへてこゝろも夏となりにけるかな　山口　末田貞節子

ひた〳〵とさゝれ波よる磯つたひ貝ひろひゆくあまの子の群　福島　爲田よしの

麥畑耕し終て夕日影見送り居れは雲雀しばなく　岩代　長谷川吉野

甲

若葉かげ君が涙の文抱きて月うちあふぐ卯のはなのみち　香川　瀬高やす子

泣く妹をすかしながらに野に立てば瀬月かげをほたる流るゝ　同上　同人

ぬば玉の夜はあけぬとも郭公いま一聲をきかんとぞ思ふ　岡山　西村清子

しげりあふ若葉の色のうつろひて庭はく人の顔もみどりに　三河　盤江と代子

さくら花さきの盛りをやからみなかはりもなくてめづるたのしさ　岐阜　小島駒子

つくばねはとほく霞みてすみた川花さくころの長閑なるかな　東京　飯塚きよ子

つくばねの春風いまだ寒からん隅田つゝみの花のしら雪　東京　清水まつ

野邊山邊はな咲きみちてしゝ鳥のこゑもをちこちたのしかりけり　豐橋　平松いと子

櫻狩かへりて後のうたゝねのゆめにさへ見る花のおもかげ　岡山　谷とめ子

のとかなる春日をあひてなとめらかくさつむ空にひばりなくなり　京都　富田眞德

花ちりしあとのつれ〳〵とひきませきのふの春の物かたりせん　三重　日野千鶴子

世のうさも忘れはてけり今日ひとひ野邊に山邊に花見くらして　美作　淸水梅子

五月雨にしばしたえにし友よりのあやめもさきぬきませとのふみ　靜岡　齋田とめ子

しと〳〵と青柳ぬらす五月雨に蛞の月傘見ゆ二つならびて　遠江　馬淵かをる

けふはゝや春の衣をぬきかへてひとへにかろき花染の袖　三重　荘司穗子

春かたみ花染衣ぬきかへて一重涼しき夏はきにけり　神奈川　足立原とく子

水上をたとりても見む若葉さすほそ谷川にはなそながるゝ　愛知　木原貞子

水莖の跡なし見れば君がいますこゝちせられてなつかしきかな　石川　篤子

夢の中の花鶯にさそはれて又も朝いをすこしつるかな　長門　蔦田冨子

春雨に水せき入れて賤の男がたれまき初る小田の苗代　青森　正子

初夏や青葉がくれの白壁の學び舍みゆる古里の道　横濱　板倉かずえ

樵こる斧のひゞきに答へつゝ人呼子鳥なになくらん　青森　夢野春子

乙

初夏の露にあくがれ行く道の海見ゆる丘に黄金花さく　東京　磯まつ子

いつしかに花も青葉となりにけり風心地よき初夏の家　東京　土師利根子

隣さへ茂る若葉に隔りぬ雀のひなのこゑきゝしより　京都　小草

乳母車若葉の影に引すゑてちこれむらしつ文ひもときぬ　三河　山田經子

みなかみは花のさかりとなりぬらんもちふろしてしひさごながれて　東京　三宅久子

梅の花すゝりの海に色こめて匂ひはふでにまかせぬるかな　青森　小川の流

仙人の住みておはすか奥山にうすみどりして春雨のふる　青森　五加木子

見渡せば四方の山々青葉して夏の初めになりにけるかな　紀伊　土井利子

たとふれば　露緒子

たとふれば君は野の石、
石なれば永久にひややか。
たとふれば君は山の井
山なれば永久にうごかず。
花鳥や笑めどうたへど
石いはず春逝かんとす。
あたらしや山の井の水
足なやみ人もとひ來ず。
燃えつくせ野のひとつ石
流れ出よ山の井の水。
かく云ひてなげきます時
さびしらに我ほゝゑみぬ。

俳句

——(初夏雜題)——

内藤鳴雪選評

天　岡山　西村長子

麥刈りて古城淋しき月夜かな

評、鬼哭夢に入る

地　青森　夢野春子

若草に露して白し牛の乳

評、昇る旭も暖かに

人　横濱　板倉かずえ

五月雨や古驛に着けば灯がともる

評、濡れそぼちたる旅衣

秀逸

鹿の子結ふ里の少女や萩わかば　京都　露緒子

箆竹を立てたる卓や百合のはな　東京　南たゞの

手文庫は反古ばかりなり春の暮　東京　中山由子

さぎ程に見ゆる白帆や春のうみ　三重　鈴木春子

行春の櫂は空しくなりにけり　岡山　西村長子

樹ぐいを打ち出る水の温み哉　東京　武田鶴子

鶯やわれは行く途いそがるゝ　備後　世羅龜子

張板の更紗に蝶のとまりけり　美作　淸水梅子

塚に來て額く人にほとゝきす　東京　芳賀リユ

片々と落花舞ひけり水の面　前橋　津村義江子

行く春のかたみの菫摘みに鬼　静岡　齋田とめ子

行くちこの帽子にやとる胡蝶哉　長岡　櫻井たみゑ

雨一日生々として新樹かな　三河　山内經子

幟立つ漁師の町や午の風　横濱　上杉らく子

山ひめのみどりも床し夏衣　三重　荘司穗子

時鳥聞きに幾野の乳母が家　東京　鈴木榮子

時鳥おもひ捨たる月夜かな　紀伊　土井しの子

若草や此所に彼處に女連　京都　加藤くれなゐ

大殿油つきて匂ひや五月闇　東京　山本ふみ子

五月雨や動かぬ牛を無理にひく　青森　竹林秋子

朝晴や若葉くゝりて神詣　山口　蔦田冨子

夕時雨柳の土手の馬子の唄　東京　磯まつ子

老木のうつろの水も温みけり　函館　羽佐間重子

春雨や土堤に行き逢ふ法の君　青森　田島正子

歌の會詩の會更けて啼く蛙　神奈川　森田田鶴子

桃の散る椽に小猫の晝寢かな　大分　桂木靜子

花ちるや朱雀野を行く牛車　岩代　長谷川吉野

春雨に今日の晴衣を濡らしけり　東京　田島信子

夏物新着
本店　神田表神保町壹番　電話本局二八五三
出店　新橋博品館階上

家庭と文學調和雜誌
本誌は女學雜誌中一等爲になるよい雜誌です。内容は實物に就て御覧下さい
五月號　一日發行
女子文壇
東京京橋大鋸町　女子文壇社出版
毎月一日發行　本文百七十頁　口繪十枚美麗　定價一冊送共拾六錢五厘　全國雜誌店賣捌
女子文壇第二增刊　新作家（五月十五日發行　價送共廿壹錢半）

曳出(ひきだし)　つくば

皐月下院の一日あめに暮れぬ、所在なさに机の曳出の、亂れたるなど整理すれば舊き、新しき葉書いくひら、蝦のやうにも燈下に散りぬ、雨なほ止ます友こひしく人なつかしき夜なり、いでや賤の小田卷われも繰り返して、遠ざかりし世の緒卷ひもとかむ。

■ゆかしい妹樣弟樣と橋の袂で、御菓子ものして新月を仰ぎ玉ふか。海濱のおもひで、筑波のたゝずまひ、孰れ詩にとらはれて美しからむ。九月上旬御歸京の由。小生は早くのぼりたきが、或は阿濟浦に廻らんも計られず(秀道)

■一日も早く御快癒のほど、神かけて祈り上さふらふ。今宵は露も立ち滴かず、れいの丘、月に照されてはつきりと、うちの二階より能く見え候。
さしのぼる我すむ山の秋の月
みそなはすらむ君もみやこに(すゑ)

■美しき笑みの名殘りのかへりみか
御手に匂ひし野の名無し草(やす子)

■あさみどり匂ふおほ野に肩並めて
いざわかぐさの香にあくがれむ(雅子)

■草の香のわかき匂ひにあくがれぬ
御手にすがりていざや摘まなむ(ゆき)

■親身も及ばぬ程御世話になり候弟こと、只今息を引きとり候。京を去る三千里の異境に、たくましき男子の血涙を思ひ給へ、多くは云はず候、たゞ弟奴逝まで君を呼び居たるがいぢらしかりき(雨米より)

■旗日と日曜と二日つゞき候まゝ、昨日妹のもとに參り候、敏夫を連れて行き候、朗かなれば堤を行くに疲れたらしき敏夫の、もう一里餘になるか、と尋ね候故勵ます爲に、一里にてはきかざる由申し聞け候ところ、そんなら小二里かと、したり顏に反問いたし候、小二里とは如何にと聞けば、約一里を小一里と申す由、髭を剃つた叔父さまより敎はりぬと答へ候、叔父樣とは御わたりなるべし、小二里とは奇拔に候ばずや(花散里)

社告

新體詩は應募の諸稿に佳什乏しきを以て今回だけ休載せり、諸姉の奮勵を切望す。

毛髮用パール　東京　平尾商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

短文

(題隨意)
△一篇百八十字以內
△住所氏名明記の事
△編輯局同人選評す

黒髪　東京　杉中春子

遊び疲れて稚兒は眠りぬ、露にほゝ笑む梢の花の、それにも似たる薄紅の頬に、亂れかゝりし黒髪は、さながら天鵞絨の様、あはれこの黒髪よ、やがては赤きリボンに結ばれ、はた取り上げられて、白薔薇の花かざす頃、さては文金の高髷氣高く、振りの袂に花にほふ春の、そゞろ眼に見るも心地せらるゝも愚かしき親心なる。(一等)

評、這へば立て、立てば歩めの親心。

佳作

紫野　京都　露緒子

廿日といへば四月も末、もう菜の花が一面に咲き綴いて、北の山々はつい鼻の先ながら、ぼつと霞んで見える、鞍馬の麓から東へつゞく松並木は加茂川の上流かも知れぬ、杉のつく／＼立つてるのは大德寺である、私の後から畑の畦を、長梯子を頭にのせて、通り越して向ふから來るお婆様に「おばア、新町野の橋は？」「掛つてる、掛つてる」お婆様は一人合點して數珠を繰りつゝ、「南無……」と行つた。

評、畫のやうな光景。

袖の露　横濱　鈴木まつ子

しづかに／＼春はくれてゆくのです、私は病氣にかかつて居ります、唯でさへ悲しい運命の身、病氣のせいで、やゝともすると涙が出ます、今日は大へんによろしいと思ひましたら、午後から又熱が出ました、家の裏の家では何か御祝ひがあると見えて、藝妓がひく三味線の音、折々人の笑ふ聲、それを聞くと私はなほ悲しくなります。

評、淺い悲しみの現はれた女らしい作。

春の一日　備中　天野その子

師の君の御手とり參らせて今日井原野にあそぶ、そも幾年振りなりけむ、いまを盛りの花の下影、靜に／＼辿りゆく、折節里の少女ら打興じつゝ無心のさまに過行きぬ、あゝ今が昔ならば、昔がいまならば……中里の堤さへも病ませる君には無理なるべしよき程より又來し道辿る、少し風出たり、花や散らんと人皆云へり、其花は先措てもと後に廻りて、却りし御肩にショール掛け參らす、噫その時、響さじと抛へし我涙ははらはらと落ちぬ。

評、狗筆を練り給はゞ佳き作となるべし。

パンザー　京都　小草

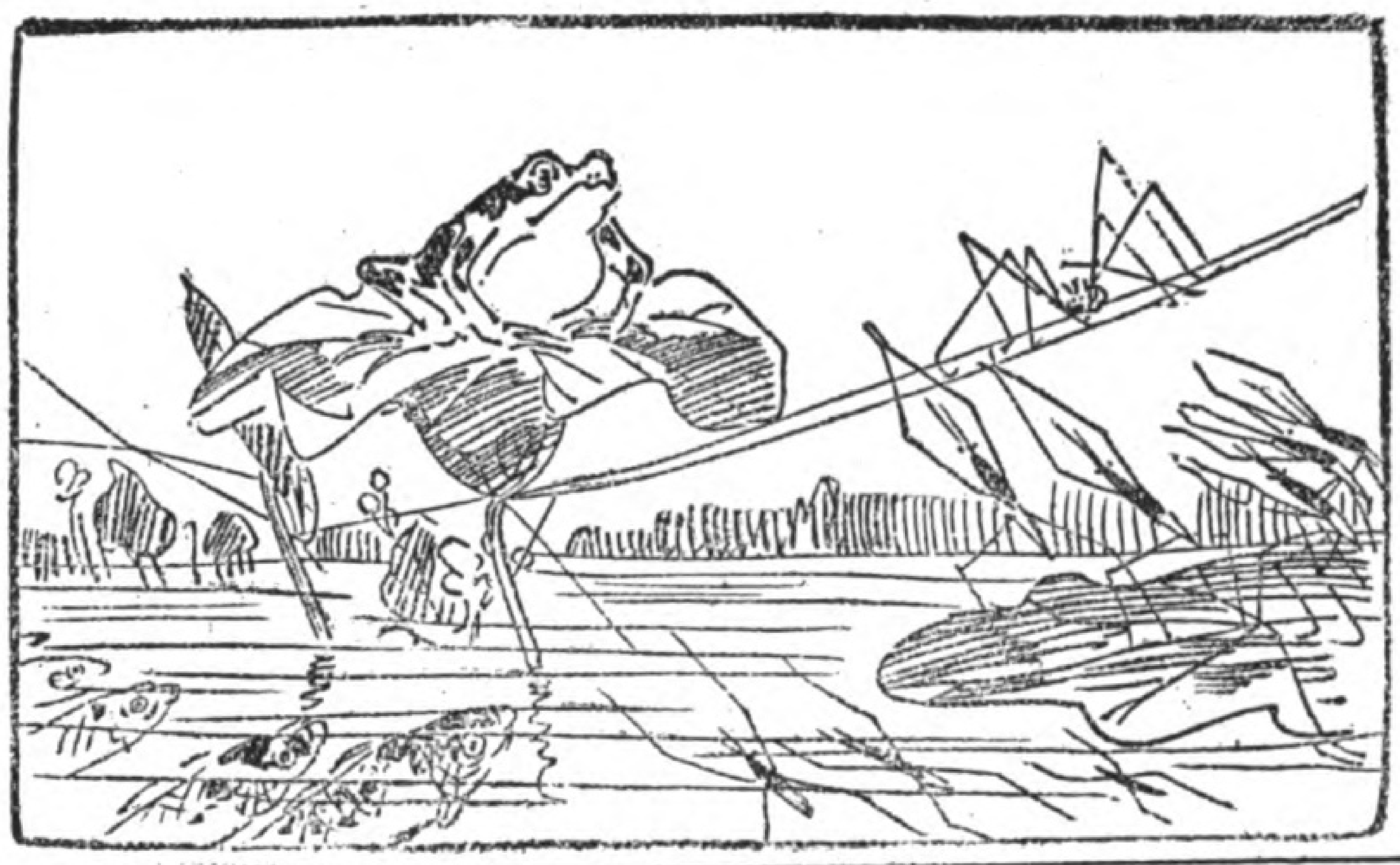
我はパンザーを愛す、パンザーは我幼少の頃はじめて兄上の賜ひしものなり、秋風襟を正さしむるころ、下種せしものは、嚴寒の霜雪にも萎まず生ひ出ち、春なほ淺くして花を開く夏花や、黄の情愛を包むに紫のゆかりを以てし、清けき花に匂ふ容姿優にして蝶の舞へるがごとし、此花のやゝ俯伏きがちに咲けるは一しほいぢらし。

評、選者もまた此花を愛す、されど選者のは兄上より賜りしものにはあらず。

蛙のたより　青森　五加木子

田舍の春もなかば過ぎました、私は例の通り達者で遊んで居りますから御安心下さい、只母上が病後の大急變に御ばあさんになりました、私も今度は母さんになりました、子供の世話はずいぶん骨が折れます。

評、短文は一篇百八十字十行以內といふ規定なり



初夏　靜岡　齋藤とめ子

青葉の露涼しき朝一人何處とあてもなくそゞろ歩きの面白さ、先づ嬉しきは賤が家の垣根に卯の花のやさしう笑める、中埋れたる池に燕子花の立てる様などあかぬ心地す、こなたの小川の岸につらなる柳は、翡翠の何處よりか飛び來て、美しき姿を水に映せる、さては大空鳴く雲雀の音に小田の蛙もおとじと歌ひきそふも、面白く早や色付ける麥畑の綠には、赤き覆盆子の二つ三つ顔ひ出でたるこよなく愛し。

評、初夏の朝逍遙は選者も大好きなり。

得意の笑　大分　桂木靜子

椽の柱にもたれつゝ冥想の眼を閉ぢて居ると、裏の森の邊で、ヅドンと砲聲一發……たちまち冥想の夢破られて、茫然向ふを見つめて居ると、今度は突然うしろの方から「姉さん甘いでせう」と吃驚してふり向くと、少き狩犬を先に立て、從弟の駒雄今年十四才になるのが、鮮血滴る四百目計りの雉子一羽、ぶらさげながら滿面に笑を含んで、やつて來た、その嬉しさうな顔。

評、うれしさうな文

「美術之日本」第一卷第一號掲載要目

春秋山水……(口繪)……川端玉章
農家飼馬の圖……(口繪)……蕉村
破れたる水瓶……(口繪)……佛國ゲルーズ
美術の研究に就て……伯爵　大隈重信
國寶の保存……子爵　金子堅太郎
藝術と實業の調和……子爵　末松謙澄
美術家に望む……法、農學博士　新渡戸稻造
美術界雜話……東京美術學校長　正木直彦
工業圖案……東京高等工業學校長　手島精一
建築雜話……工學博士　伊東忠太
日本美術の研究……京都帝國大學教授　上田敏
青年畫家に對する希望……鈴木暢幸
彫刻の新機軸……新海竹太郎
印度の飛彈匠と百濟河成……大村西崖
訪問雜話(湯原東京音樂學校長)……記者
東西美術の比較……貴族院議員　下條正雄
古畫綴々記(一)……審美書院主幹　田島志一
懇親會……(小說)……森林太郎
島影……(短詩)……與謝野寛
罌粟……(小說)……岡田八千代
見えぬ花の匂ひ……(長詩)……蒲原有明
落紅……(短詩)……與謝野晶子
歸路……(小說)……神谷つくば
あさみどり……(短詩)……尾上八郎
蓮華草……(小說)……藤波春枝
管樂の秋……(短詩)……佐々木信綱
病兒の夢……(長詩)……川路柳虹
新綠……(短詩)……紅村
文藝時論……(時評)……太田水穂
四月の劇壇……(時評)……放下僧
美術界時報……記者

▲一冊定價金十五錢郵税金一錢、京橋區新肴町十番地審美書院發行、每月一回一日發行

奥州登米郡の五月上旬　宮城　夏川あづま

雪と風に閉込められしも、友人の葬禮送らんとて外出しつ、袖垣にコメコメ白く匂ひ、蒲公英など紫に黄に白に野邊を飾り、眞盛りの栗の花には胡蝶を狂はしむ春の水堀江に溢れて、苗代に麥畑に賤の男は暇なげなり、やがて御墓に到れば、馬醉木の花二房うな垂れて白う咲きぬ。

評、送葬には似合はぬ文なり。

もだえ　下野　森子

あゝ八重さん賴母しい八重さんは近く嫁れるさうな、もう二度と逢へるか逢へないか知れないと思ふと、私は悲しく恨めしく胸が亂れる、そして女にあられもない、何も彼も翔飛したいやうな、自分ながら耻かしい程、心が狂ふて來るのです。あゝ何故でせう。

評、佳作中の佳作、も少し筆が廻ると猶よい。

糸瓜泣く　横濱　板倉かすえ

白陽の權威酣なる日盛り、晝時は一人の妹と二人の弟と共に、竹植えたる庭に對し、繪草紙などを見て遊ぶ母上の淸水に冷せし西瓜割りて振舞ひ玉ふは嬉し、倦みては悪戯するものあるに、西瓜喰はれし盆の上に誰が悪戯ぞ、糸瓜の長い顔。目鼻かいて躍れと云へば糸瓜泣く。

評、ゴツ／＼した角を、取らなければいけません「白陽の權威」などいふ辭は堅くるしくていけません。

愛國婦人くらぶ

木俣六女子樣から御手製の草花標本を編輯局に御送り下さいました、大層御見事に出來ました、▲賞品に對する禮状、佐野くに子、中隈富士子、鈴木まつ子、武田つる子、各通▲岡田春子樣と桝田君み子樣と、御住所を忘れましたから御しらせ下さい、賞品を御送りいたします。▲嫩草會報告、嫩草會は幸ひに皆樣の御注意を曳いて、既に四月中に滿員になりました、然し今でも毎日のやふに入會御希望の方がありますので、それを一一御斷りするのもお氣の毒ですから、種種幹事の間で相談を致しまして、まだ歌を作つた事のない人で、作りたいと思ふ方だけ、特別に入れることにいたしました、御希望の方は郵劵封入の上、私まで御申込なさいませ。(紳谷生)▲此欄の御投書を歡迎します

文苑投稿規則

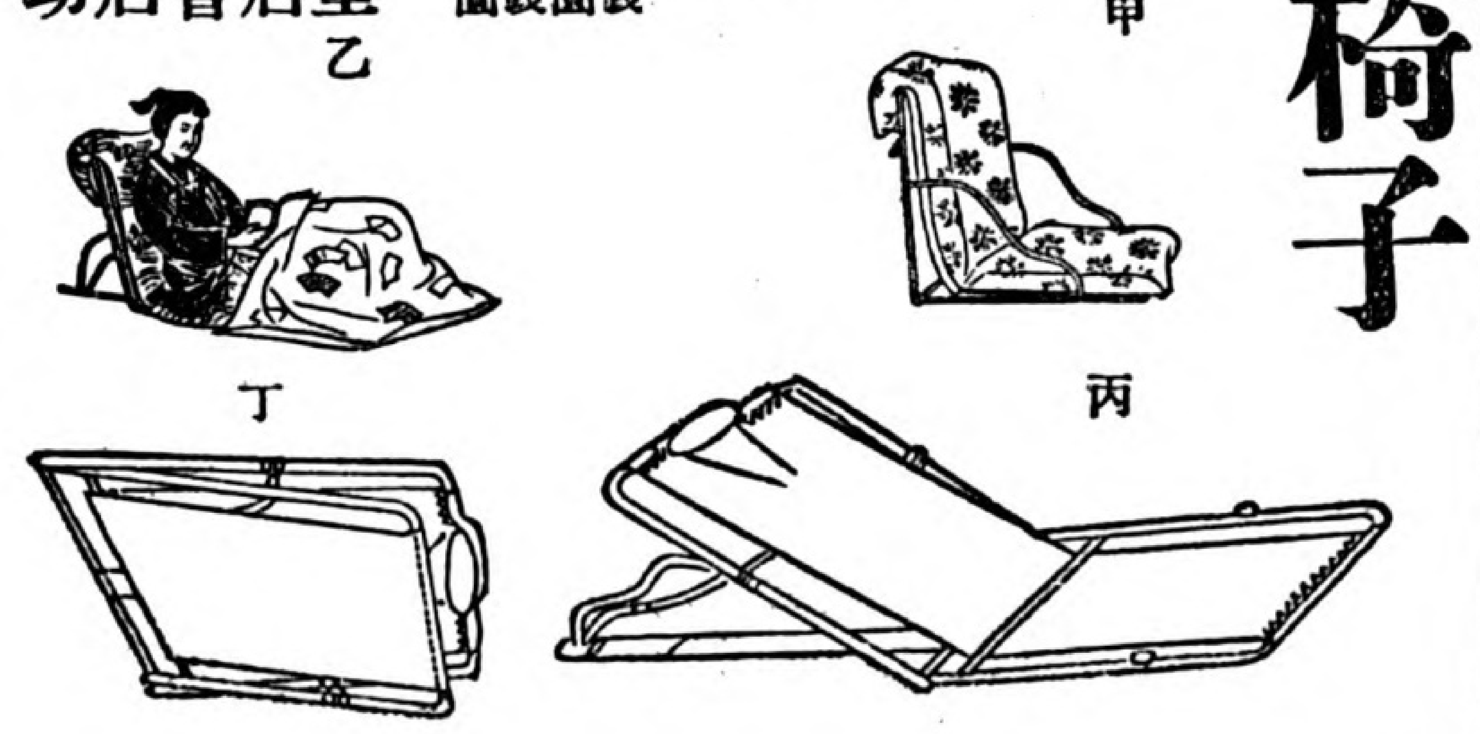
一、和歌俳句の用紙は葉書又は夫と同じ大さの厚紙
一、住所氏名の明瞭ならざるものには賞品を呈せず
一、短文は一篇百八十字十行以內のこと
一、五日發行の分は前月十五日締切、二十日發行の分は前月三十日締切のこと
一、賞品は發表後十日以內に送付、未着の際は御遠慮なく御申越されたし

專賣特許 一森式坐椅子

此坐椅子は一箇にして下圖甲乙丙丁の如く坐椅子となり寢臺となり疊込めば縮少して携帶に便なり
材料は鐵骨にエナメル又は漆を塗り之に厚布を張り後頭部の觸るゝ所には螺旋狀の枕を裝置しあれば枕と厚布とにて身體を支ふるにより心地誠に宜しく老人產婦は固より强壯の人と雖もこれに倚りて休息し又は讀書を爲せば自然に胴部を擴め健康を加ふ

價格
エナメル塗更紗蒲團付　金六圓五十錢　特製金七圓
エナメル塗メリンス友禪又は舶來模樣毛繻子蒲團付　金七圓五十錢　特製金八圓
其外上等品はお好に應じ調製可仕候

製造發賣元　東京市芝區下高輪町廿一番　電話新橋三〇六五番　樂民堂
特約店　東京　大阪　三越呉服店
同　大阪市西區土佐堀裏町六八　電話(長)西一八二三番　常磐商會
販賣店　東京市京橋區銀座三丁目　電話新橋六五六番　鈴木毛織物店
同　橫濱市住吉町五丁目六八　電話一〇七二番　杉野亥之助
△取次販賣御希望の向きは樂民堂へ御申込相成度候



甲　乙　丙　丁

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

御扇子

愛國婦人會御用達
京都寺町五條下ル東側
御影堂　持阿彌

商品切手調進仕候

甲斐絹屋

本店　神田區小川町電話本局四八九
振替貯金口座一五〇〇〇
支店　京橋區銀座　電話新橋八三三

醸造元　千葉縣野田町　茂木七郎右衛門
電略號（キハク）又（ハク）

最上醬油　キハク印
旅順路易博覧會　名譽大賞牌受領

キハク印
醬油は味がよくて調理にかなつて居ると云ふことは皆さん一般の評判ですどーか其あぢのよくてそして經濟であると云ふことを御ためし願ます

東京支店　日本橋區小網町三丁目
電話浪花五七七四
中野長兵衛

醫家處方調劑
藥品の純良
調劑の正確

醫師ノ處方ニ係ル調劑ハ必ズ調劑部主任之ヲ擔任シ親切丁寧綿密ニ且ツ迅速ニ調劑ス藥局トシテノ設備亦大ニ完全シ既ニ久シク大醫諸先生ノ信認ヲ辱ス藥品ハ試驗部ニ於テ嚴格ナル檢査ヲ施シ全ク純良品タルヲ確認シタル上之ヲ使用ス

神田區今川小路三丁目角
尾澤純良堂
藥劑師　大西橋三　藥局
藥劑師　田中義廣
藥劑師　長谷川賛
電話本局一五一八番

本澗かや
ぬいもんな〜このや
疊表花莚
座ぶとん

營業案內一報次第進呈仕候

登録商標

東京日本橋通一丁目（日本橋角）
（や）近江屋　西川甚五郎
電本九四七、長九四八
貯金口座四四九九

東京日本橋通四丁目
近江屋　西川甚五郎
電本特長三三、一三三一番
貯金口座　四九九一

THE GEM
ゼム
衛生家必携　懐中良薬

愛國
理想の婦人
深き母、常に快活なる氣を以て子を育する母の爲身を愛し、家の事を執るに明敏なる婦人
家庭にあり又交際場裡にありて常に清涼快活ならんには「ゼム」を服用せらるべし

◎主効
◎頭痛◎眩暈◎氣鬱◎舟車酔◎時候傷◎水傷◎食傷◎消化不良◎口熱◎口中惡臭◎其他常用すれば氣分を爽快にし音聲を美にし諸種惡疫を豫防す。

定價七十五粒入十錢百六十
粒入廿錢四百粒廿五十錢九
百粒入壹圓容器入廿錢

東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會

金銀盃類

貴金屬寶石美術品袋物一切何品に依らず迅速と廉價を旨とし誠實に新調又は改作の御用相勤め可申候間何卒一層の御引立を以て多少に不拘御下命被下度奉願上候

宮內省御用達
玉寶堂
電話下谷　特九六五番　一二四四番

小兒科専門
腺病質、胎毒、貧血
小兒喘息、百日咳
小兒皮膚病、
ドクトル メヂチーネ
長井岩雄
日本橋數寄屋町一（呉服橋外）電本百八十

內科専門
杏雲堂醫院
神田區駿河臺
電話本一六六九
院長醫學博士　佐々木政吉

にきび
をとる有効化粧液
チフリ
到る所に販賣し
廿グラム入　二十五錢
東京本石町　松澤常吉

製造卸小賣
佃屋商店
地方は代金引替小包送料五個迄十七錢五個以上は送費當店持海外は實費頂戴可仕候
東京日本橋區ふきや町（電浪二三四八）

登録商標

元祖ねびへしらず（小兒用）

僞物あり御買ひ求めの節目印登録商標に御注意願上候

直段
表中形裏ネル
一才用二十錢
二才用廿三錢
三四才用廿六錢
五六才用廿九錢
七八才用卅三錢より
表メリンス裏同上
一才用三十七錢
二才用四十一錢
三四才用四十六錢
五六才用五十三錢
より四十二錢迄各種

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人廣告取扱

神田三河町 博報堂
京橋宗十郎町 正路喜社
日本橋蛎殼町 春風舍
京橋南紺屋町 一星社
神田須田町 金蘭社
本郷區湯島 弘進社
京橋區 廣告社

內科一般　板垣亭
東京神田美土代町三丁目十七番地
午前宅診 午後往診
電話本局貳千九百七十番

大森澤瀉屋製
寒製やき海苔
●燒海苔は寒製の一品にして常に新海苔同樣の美味あり
●燒海苔は永く貯藏に堪へ風味佳良なり
●燒海苔は御贈答又は御進物には最好此の上なし
●大鑵五十錢　●中鑵三十錢
發賣元　東京市四谷區麹町十二丁目　伊勢治茶店
電話番町六百六十番　振替口座東京六三八五番

婦人病專門　院長　櫻井克己
櫻井醫院
芝明舟町十九虎門外宮樣前電話新橋三三二四

產科婦人科小兒科　院長　女醫鷲山彌生
診察時間　毎日午前八時より
內科部長　醫學士武智基造
醫員　毎日午後三時より
診察時間　火木土午後壹時より
病室及產室の設けあり入院隨時
東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地
東京至誠病院　電話番町二二五七

五月一日より
夏物珍柄大賣出し仕候

よせぎれ見切反物澤山取揃へ置申候

●新案歌舞伎模樣は現に浴衣地、裾模樣、友禪染、帶地、帶揚、半襟、ネクタイ等迄應用致され候

●縞セル、縞ヂール等の毛織物は英佛より直輸入のものなれば柄行、地合は御好み次第に御座候

●洋傘、帽子、靴を初め和洋小間物化粧品類は孰れも流行の粹を蒐めたるものを發賣致し居り候

●仕立洋服は引續き大好評に有之今や歐米最新式のもの澤山出來合居り候間何卒御試用願上候

東京日本橋
白木呉服店

松澤ホーサン石鹸

色白く艶をだす（大形 廿錢　小形 十錢　新小角 十錢）
●近來類似品あれば御買求の節は上部の商標に御注意を乞ふ○市內賣藥小間物化粧品店にあり
東京本石町四　松澤常吉

大黑天印
宮崎葡萄液
宮崎葡萄液は理學博士藥學博士長井藥學博士下山兩先生の指導の下に創製せしものにして恰かも葡萄の實を食するが如く毫も酒精分を含まず腦を刺戟するの虞れなく香味共に佳良にして消化力を助け血を增し肉を肥やし日常これを飲用せば偉大の効を奏し衞生上必須の飲料なり
▲ブランデー、ウヰスキー氷等に混せ飲用せば其の味ひ最も妙なり
▲御婦人又は酒を嗜まさる人の交際場裡に最適當の好飲料なり定價大壜四合入四拾錢小壜二合入廿二錢
宮內省御用達
發賣元　東京日本橋區通旅籠町（電話浪花八七〇）振替口座一九三七番　甲斐產商店

麝香獸印
ムスク香水
（大瓶 壹圓　中瓶 六十錢　小瓶 二十五錢）
芳香の永く保つ點にて高評也
（注意）近來類似品を販賣する者あれば御買求の節は右瓶の形狀及び二頭の麝香獸に御注意を乞ふ市內賣藥小間物化粧品店に於て販賣致し居り候
東京日本橋本石町四　松澤常吉

東洋一の商品陳列即賣館
第一 第二 帝國博品館
第一館 新橋角　電話新橋一六五二番
二二六一番……あらゆる物品を最も格安の正札附にて陳列販賣す
第二館 上野廣小路　電話下谷五三六番三〇四四番……館內あらゆる物品を最も格安の正札附にて陳列即賣するの外左記特殊の設備あり
喫茶店。和洋料理。ミルクホール。汁粉。壽司。菓子果物店。美術室。盆栽盆景。理髮店。休憩所。階上便所。洗面場。夜でも撮る寫眞場。
第一第二館內各店共通商品切手發賣……御買上品は市內無賃で配達致します

明治四十二年五月廿日發行（毎月五日廿日二回）（定價金三錢五厘一ヶ月七錢郵稅不要）發行兼印刷人 山澤俊夫　編輯人 永持德一　（廣告料一行金六拾錢）
發行所 東京麹町區飯田町 愛國婦人發行所　印刷所 東京市牛込區榎町 日清印刷株式會社

附錄 愛國婦人會記事

□評議員會　本月の例會は來廿六日午後二時より本部に於て開催、參事會員の改選を行ふ。

□各支部顧問招待會　總裁殿下には去八日午後三時在京中の各支部顧問を永田町なる御邸に招待遊ばされたり當日參會せるは

北海道、京都、兵庫、長崎、新潟、千葉、茨城、栃木、三重、靜岡、滋賀、岐阜、長野、宮城、福島、岩手、青森、山形、秋田、福井、石川、富山、鳥取、島根、岡山、山口、和歌山、德島、香川、愛媛、高知、福岡、大分、佐賀、熊本、宮崎、鹿兒島、沖繩

の各支部顧問にして東伏見宮妃殿下、伏見若宮妃殿下を始め奉り本部よりは岩倉會長、毛利、鍋島、岡部三理事、岡部、松平(正直)二顧問、佐藤會計監督、松平(須磨子)、高木、長岡、柳谷、古市、跡見、有島、佐藤(猶子)、三輪田、戸田、尾崎、龜井、高木(鎌子)、早川、下岡、關、山脇、大久保、棚橋各評議員出席御殿大廣間に於て東伏見宮妃殿下には總裁殿下御名代として左の御令旨あり

本會の發展に關して支部顧問諸氏の援助に依らざるなし本日幸に諸氏と相見るは欣喜の至なり諸氏が斯會の爲盡瘁せられしを謝し茲に聊か慰勞の意を表して將來尙一層盡力あらんことを望む

大森京都支部顧問は之に對し御答辭申上げ夫より席を改め御庭の新綠影深き邊にて立食の饗を賜はり午後四時半散會せり

□擴張部　擴張員八田一精氏は四月廿六日山梨支部に出張し、支部長及顧問に面談し、會務擴張に關する事項を協議し、尙ほ支部長宅に於て、副長以下幹事十五名と會同し、擴張の主意を演述し、且つ將來の方針其他事務上の打合をなし、同廿八日歸京せり。

□銀盃贈與　靜岡支部主事田中久太郎氏は多年會務に盡瘁せられ、會員の募集殊に會費の整理等、成績顯著なるを以て五月一日會長より特別謝狀に銀盃一組を添へて贈與せり。

□遺族接待　本月五六兩日靖國神社臨時祭に際し彙て誌上に掲げし如く本會に於ては本年の合祀者たる軍人遺族の參拜者に限り新築の本部建物に於て接待を爲し茶菓を饗し紀念品を贈與せり、五日には岩倉會長初め、二條、戸田、井伊(増子)三井(五十子)、古市、高木、早川、仁尾、松浦、龜井、佐藤各評議員、六日には長谷川辰子、棚橋絢子、三輪田眞佐子、細川同子、仁杉歌子、關むら子、淸水米子、渡邊源子、原口せき子、松村琴子、井上光子、下岡松子各評議員出席接待の勞を採られたり。

東京支部

□寄贈品　去月一日日本第一麥酒株式會社より、當支部に對しマッチ小箱三千個を、仝月十日守田治兵衛氏より錫入寶丹貳百個を、孰れも本會忠愛の旨趣を贊成して寄贈せられたり。

□追弔會幷懇親會　京橋區幹事部にては來五月廿三日午後一時より、築地本願寺に於て、當區內の遺族癈兵を招待し、戰病死者追弔會並會員懇親會を催し、餘興には三天齋小正一の手品、柳亭鶴枝の百面相等あり、詳細は次號に揭ぐべし。

東京支部北多摩郡幹事部遊說日誌

野中彌知子

四月十一日午前七時卅分飯田町發列車にて出發東京支部北多摩郡幹事部慈善演藝會開催に付出張國分寺驛に於て下車是より腕車にて府中町に着せしは同九時半頃なりき會場寺院に入る當日は天氣快晴數發の煙火を合圖に午前壯嚴なる招魂祭を執行郡內の遺族癈兵皆悉出席其數百五十名一般來會者一千余名午後一時演藝會場に入り來り二時開會鷲見幹事部長開會の辭を述へ次に講話了て劍舞手品義太夫浪花節茶番等の餘興あり遺族癈兵に於ても大に滿足せるもの丶如し當日は本部より擴張委員八田一精氏も臨席され一同歡を盡して散會せしは同五時過なりき五時四十分國分寺發列車にて歸京せり

十二日午前九時卅分飯田町發列車にて出發先方會場に着せしは十一時過なりき一同紀念の撮影をなし午後一時開會鷲見幹事部長開會辭を述へ了て講話次に演藝前日の如し當日も天氣晴朗相會する者千有余名兩日とも非常なる盛會なりき

本附錄の說明

去三月廿七日愛媛支部宇摩郡幹事部は第一回總會を開催致しました。本號附錄とせるは其砌の紀念として寫したもの。場處は宇摩郡立農林學校講堂前。後列右より三島町長横田正夫、支部主事三宅芳松、津根村長星川盛一郎、土居村長三宅眞治、天滿村長近藤喜三郎、宇摩郡長坂井牧之助、郡書記右津廉太、同矢野卯三郎、同八石大麟の諸氏。中央右より委員大倉ナカ、富本アイ、田渡照野、森タカ、重松キタ、高橋サモ、郡視學白石乃太郎、事務員村上數市、前列右より委員石ツユカ、谷チユウ、前谷アサ、幹事部長坂井エツ子、警視黑田夫人、支部長安藤菊子、幹事前石キシノ、守谷キヌ、種田三佐、横田スミ、林直の諸氏。因に當日參列の會員は約五百名、軍人遺族及癈兵諸氏の參列二百五十名餘にして、各參列員一同滿足の上無事閉會せる由。

函館支部

□遺族慰藉概況　本月六日函館招魂社大祭執行に付、當支部より紅白饒餅一重ねを神前へ供へ、軍人遺族參拜者の休憩所を同社前通り塚田治三郎氏邸內に設けたり、午前十時半遺族一同神前拜禮の了るを待ち、支部の會旗に音樂隊を附隨吹奏せしめ、職員之を先導休憩所へ案內せしむ、茲に會する遺族及同伴の兒童に合せ百十余名に達せり、一同へは茶菓を供し折詰紅白餅を贈與し、音樂隊を聘して吹奏せしめ、蓄音器の余興を添へ以て參會者を慰藉せしむ、職員は一同出席斡旋の勞を執り、欵待に努めたるを以て、遺族者は何れも滿足の意を表せり、同時區內の名望家杉浦嘉七氏より遺族一同へ菓子を寄贈せられたり。

富山支部

□協議會　去月廿五日午前十時三十分より會員增募方等に關し、各幹事部長並同事務員協議會を富山公會堂に開き午後一時閉了、引續き三十七八年戰役の功に依り拜戴せる金杯披露會をなし、午後四時散會したり。

□下新川郡幹事部　魚津町分區の第二回總會を五月二日仝町常泉寺に開く、當日宇佐美支部長は草野事務員外一名を隨て午前十一時魚津驛に着し、佐伯同幹事部長の先導にて、魚津授產場授業の狀況を視察し、それより式場に到着午後二時開會、福引の余興ありて散會せるは午後四時過ぎなりき、當日の式次第は左の如し

第一鈴　來賓及會員着席

第二鈴　支部長着席

第三鈴　小野分區委員開會の辭に併て精算報告次に宇佐美支部長の祝辭次に會員總代小野幹事の答辭、佐伯幹事部顧問の演說に引續き、三十七八年戰役功勞に依り拜受の銀杯披露を爲し、次に草野支部事務員の會旨普及演說

第四鈴　閉場

大分支部

□癈兵慰藉會幷總會　西國東郡幹事部にては仝郡田原村に於て、客月廿一日癈兵慰藉會を開き、同時に同村內愛國婦人會總會を左の順序に依り開催し、閉會後癈兵貳名に物品及茶菓を參列會員六十五名に茶菓を饗したり

順序

一號鐘　一同着席

一　主催幹事開會の旨趣を述ぶ

二　幹事部長代理事務員式詞

三　幹事癈兵に對し慰藉の辭及物品贈呈

四　癈兵總代答辭

五　田原村軍人團長慰藉の辭

六　愛國婦人會員總代の辭

七　幹事閉會の辭

附記　癈兵へ贈與したる物品は「シャツ」各一枚なり。

救養所日誌

三月廿一日(日曜　晴)　本日愛國婦人會救養所を假に芝區青松寺に開き京都以下十九支部より募集せる幼兒四十四名を受領す此外北海道より四名鹿兒島縣より二名未だ到着せず全員姓名は(北海道)猿留龜太郎、山口久太郎、山川教雄、島田一郎(京都)松本廣三、小川右一、黑川留次郎(兵庫)山鳥芳太郎(長崎)荒木彌太郎(新潟)齋藤宗次郎、山田貞一郎、遠藤喜太郎(群馬)萩原正博、豐原康三(茨城)國友末雄(栃木)上吉原利平(奈良)太田茂(三重)位田信一、伊藤三郎(愛知)長谷川信、梶田金義、永井駒之助、伊藤秀一(靜岡)永井一馬、秋山末次郎(福島)富永順太郎、土屋吉之助、大和田卯之吉(石川)(小酒幸盛、金谷磯治(富山)伊林宗太郎、北野繁次郎(鳥取)前島幸寬、杉山義次、船越繁藏、岩田芳盛(廣島)酒井福松(香川)藤田石三郎、山田榮、藪內權次郎(愛媛)渡部一美、金子漸、河合盛經(福岡)大坪進、久保義匯、金丸重雄(鹿兒島)能見義憲、森田榮(函館)渡邊富太郎、川端喜三郎

一、況容概況次の如し　大原寮長、同夫人、森副寮長、小杉會計、村井事務員は早朝より收容準備を整へ頓て午前九時より十時までに前揭四十四名の幼兒は各支部派遣員と共に來集す間もなく佐藤所長來臨幼兒は一體に五分刈に理髮せしめ入浴(此時大原夫人は特志婦人二名と協力して全員幼兒を洗濯せり)新衣を給し着物の上午餐に就かしむ午後二時に至り一同を列座せしめ所長より揭示せる「うそいふな」「中よくせよ」の二個條に就て切實に其心得方を訓示し別に各支部員に對し所長より挨拶ありたる後壹鑑を呈し同時に寮長寄贈に係る餅及び煎餅を一體に分配す午後四時寮生收容式を了

一、大澤醫師全員寮生に就き所要の身體檢査をなせしが所記以外皆無事、血膜潰瘍(太田茂)虛弱にして肺炎加答兒の虞ある者(杉山義次)骨格彎曲及びナマスの者(岩田芳盛)以上三名は前段により不合格となるも四月五日開會の本會總會迄加療して其情況を見ることとせり

一、本日給與品各一人分シャツ、綿入、綿羽織、小倉袴、洋傘、毛布四枚、敷布二枚、枕、帯、襦、帽子

一、寮長床敷き方揚け方教授の後午後八時卅分就寢

一、副寮長及事務員は寮生在寺中寄宿することに決す

一、當日午餐は殘飯多し晚餐は稍や少し

三月廿二日(月曜　晴)　六時半起床　一、七時半寮生は引率せられて二重橋外に於て　皇城を拜し次に靖國神社に參し歸路愛國婦人會本部に至り建築中の教養所を一見す此時精華學校田代教頭來臨に付一同に挨拶せしむ午後二時歸寮副寮長事務員同行す

一、本日北海道支部募集幼兒猿留山口山川田島の四名支部員同伴到着身體檢査異狀なきを以て寮生とす

一、午後六時麻布往實寺住職櫟木仙師來寓お伽噺幻燈活動寫眞等にて寮生を慰藉せらる

一、寮長より床敷き方を練習せしめ午後九時就寢

一、本日受診患者七名、血膜潰瘍(太田茂)鼠蹊(前島幸寬、藪內權次郎、遠藤喜太郎)下肢潰瘍(荒木彌太郎)血膜炎(金谷磯治)肺炎加答兒の虞あり(杉山義次)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

癈兵事實談

癈兵實歷談筆記

元步兵第十八聯隊第四中隊
一等卒 新村安吉
明治十四年十一月三日生

家族
濱名郡淺場村若林千百十三番地
戶主 安吉父 新村代吉
文久元年一月廿八日生
明治三十九年十二月六日死亡 養父 彌七
文政十一年五月二十日生
養母 はつ
天保四年六月七日生
明治三十七年四月十五日死亡 代吉妻安吉母 つた
万延元年十一月十日生
長男 安吉
明治十四年十一月三日生
三女 はつ
明治廿四年九月九日生
四女 すみ
明治廿八年四月廿八日生
三男 榮之進
明治三十年十月十五日生
長男安吉妻 やす
明治十九年四月十日生

明治三十七年三月十日ノ充員召集令下リ同月八日出征ノ門出ヲ祝シ（當時濱名郡淺場村若林丸山源藏次女やすト婚姻ノ契約整ヒ居リシモ出征ノ場合生還ヲ期セサルヲ以テ幸ヒ無事歸省スルヲ得バ其際結婚ノ式ヲ擧グルコト、シテ告別セリ）仝月十日豐橋步兵第十八聯隊第四中隊ニ入隊而シテ豐橋出征ノ前日村井少尉ノ從卒ヲ命セラレ三月廿五日野戰員トシテ豐橋衛戍地出發四月二十日宇品出帆五月五日清國盛京省猴兒石ニ上陸仝月廿六日盛京省南山戰闘ニ參加ス其際敵彈ノ爲メ股間部貫通銃創ヲ受ケ直ニ後方部隊ニ送ラレ第三野戰病院ニ收容六月廿日金州兵站病院ニ轉院七月十八日靑泥窪ヨリ病院船盛廣丸ニテ内地ニ後送セラル仝月二十六日午後一時宇品港ニ着直チニ上陸其レヨリ擔架輸送ニテ廣島豫備病院ニ收容セラレ八月六日迄看護ヲ受ケ居タリ其間重傷ノ事故殊ニ身體ヲ左右スルコト能ハス食事ハ一々看護婦ノ手ニ俟ルノ外ナク兩足ハ麻痺シテ少シモ動カス從テ知覺ナカリシ然レ共少シク氣分宜シカリシ故同月七日午前二時同所ヨリ名古屋ニ輸送セラレタリ重傷者トシテ特ニ看護人一名ヲ附セラレ九日漸ク名古屋豫備病院ニ入ルヲ得タリ三十八年一月迄同所ニ於テ治療ヲ受ケタルモ少シモ功ヲ奏セス兩足ハ以前ト少シモ異ナル〻ナク大小便ノ知覺モナク實ニ耻シキ有樣ナリシ然レトモ食事ハ幾分ノ自由ヲ得ルニ至リタリ以上ノ如クニシテ到底治癒ノ見込ナク日々憂欝ニ日ヲ送ル迄ナリシカハ醫員ニ恩給診斷ノ手續キヲ請ヒ赤十字社醫院加藤某氏ノ身體檢査ヲ受ケ三月三日兵役免除ノ辭令ヲ下附セラレ直ニ歸國ヲ命セラレ其際未タ兩足麻痺步行スル能ハス二名ノ附添看護ヲ受ケ汽車ニテ同日午後十一時歸省ス先ツ淺場村有志ノ歡迎ニ對シ感謝シ終テ一族ノ無事ヲ祝セシニ母ノアラサルヲ疑ヒ問ヘトモ唯一人答フルモノナク只默然トシテ流涕スルノミナリシ安吉思フニ母ハ日頃小心ナル方ナレハ負傷ニ驚キ其場ニ出テサルモノナラントシテ一同ニ向ヒ負傷ノ爲メ身體ノ自由ハ失フト雖トモ最早生命ニハ氣遣ヒナキヲ以テ心配ハ無用ナレハ母ニモ早ク面會シタシト述ヘタレハ茲ニ始メテ出征後三十七年四月十五日難產ノ爲メ死去セリト告ケラレ且出征ノ際決別セシ未婚ノやすハ其後安吉ノ不在中亡母ノ看護ハ勿論祖父母父弟妹ノ孝養一家ノ家整何クレトナク盡力シ傍ラ農業ニ余念ナク精勵セラレタルヲ知リ一時ハ前後ヲ忘ル、ニ至リタリ喜憂ヲ語リ一眠モナサス夜ヲ徹スルニ至レリ其後身體ニハ時々故障ヲ生シ兩足ノ苦痛甚シク殊ニ兩便ノ自由ヲ欠キ其都度やすノ看護ニ專心ナル實ニ自分ノ口ヨリ申スハ耻シキ次第ナカラ感泣謝スルニ辭ナク寢具ヲ以テ面ヲ掩ヒ涙ニ哭ルトキモ多カリシ每年三四回ハ醫師ノ診斷ヲ受ケ腹痛又ハ腎臟ニ故障ヲ覺ヘ一日トシテ安樂ナル時ハナカリシ故其不具ヲ即チメルコトモ多カリシカやすハ慰撫ニ俟リ今日迄ハ生存セリ且祖父ノ老死祖母ノ眼病ニ罹リ不自由勝ナルモ父及妹等ハ農業ニ追ハレ附添看護スル能ハサルヲ以テ安吉ノ看護ハ共ニ萬事ニ注意シ弟妹ヲ愛シ又屢々入浴等ニハ自分ヲ耕作車ニ乘セテ湯屋ニ運レ行キ又ハ天氣快晴ノトキナドハ例ノ耕作荷車ニ布團ヲ敷キ近郊ヲ遍遊シ吳ル、ヲ何ヨリノ樂シミトナセリ明治四十年頃ヨリ身體モ少々健康ニ向ヒタレトモ兩足ハ曾以前ノ如ク麻痺シ足ハ斯ノ如ク衰ヘ到底身體ノ快復ハ夢ニモ思ハサルヲ以テ妻やすニ他ヘ緣スルコトヲ勧メタルモ應セサルヲ以テ懇望ニ任セ明治四十年三月二十三日付ヲ以テ結婚入籍ノ手續ヲナシタリ其後幸ニ幾分ノ健康ヲ保チ今日ニテハ漸ク大小便ノ知覺モデキドウニカコーニカ自分ニテ便スルコトヲ得ルニ至リ從テ看護者モ始終附添フテ要セサルニ至リシハ誠ニ嬉シキコトナリ

地方愛讀諸姉に謹告

曩て廣告致候如く愛國婦人地方大取次所中不都合の廉ある向へ先般來交渉致居候結果突然本誌不着等のこと可有之然る場合には該取次所は既に當發行所と關係無之に至りしものと認められ直接當發行所購讀方御申越被下度右は特に熊本、群馬等各地に於ける大取次所よりの本誌愛讀諸姉に對し豫め誤解なきやう謹告候也

愛國婦人發行所

產科婦人科專門
診察每日午前 入院隨時
淺草區左衞門河岸 電話下谷一〇二八
岩田病院

神田區西今川町三番地（電話本局三二〇一九）
内科病特に腦脊髓神經疾患
峰内科醫院
院長 ドクトル メヂチーネ 峰秀世

○院長 ドクトル 木村順吉
京橋丗間堀一丁目角（電話新橋二六七〇番）
婦人科產科木村病院

京都御料理
お多福豆
平野家東京支店
電話本局三千百三十番
東京日本橋區上槇町拾壹番地

院長 醫學博士 榊順次郎 婦人科產科 每日午前診察
副院長 醫學士 久保徳太郎 婦人科外科 外國留學中
副 醫學士 田代謹二 婦人生殖器病 泌尿器病及內科一般 火木土午後診察
●施診火木土午後一時至二時
婦人科產科 榊病院
麴町三番町三三（電話番町三九五）

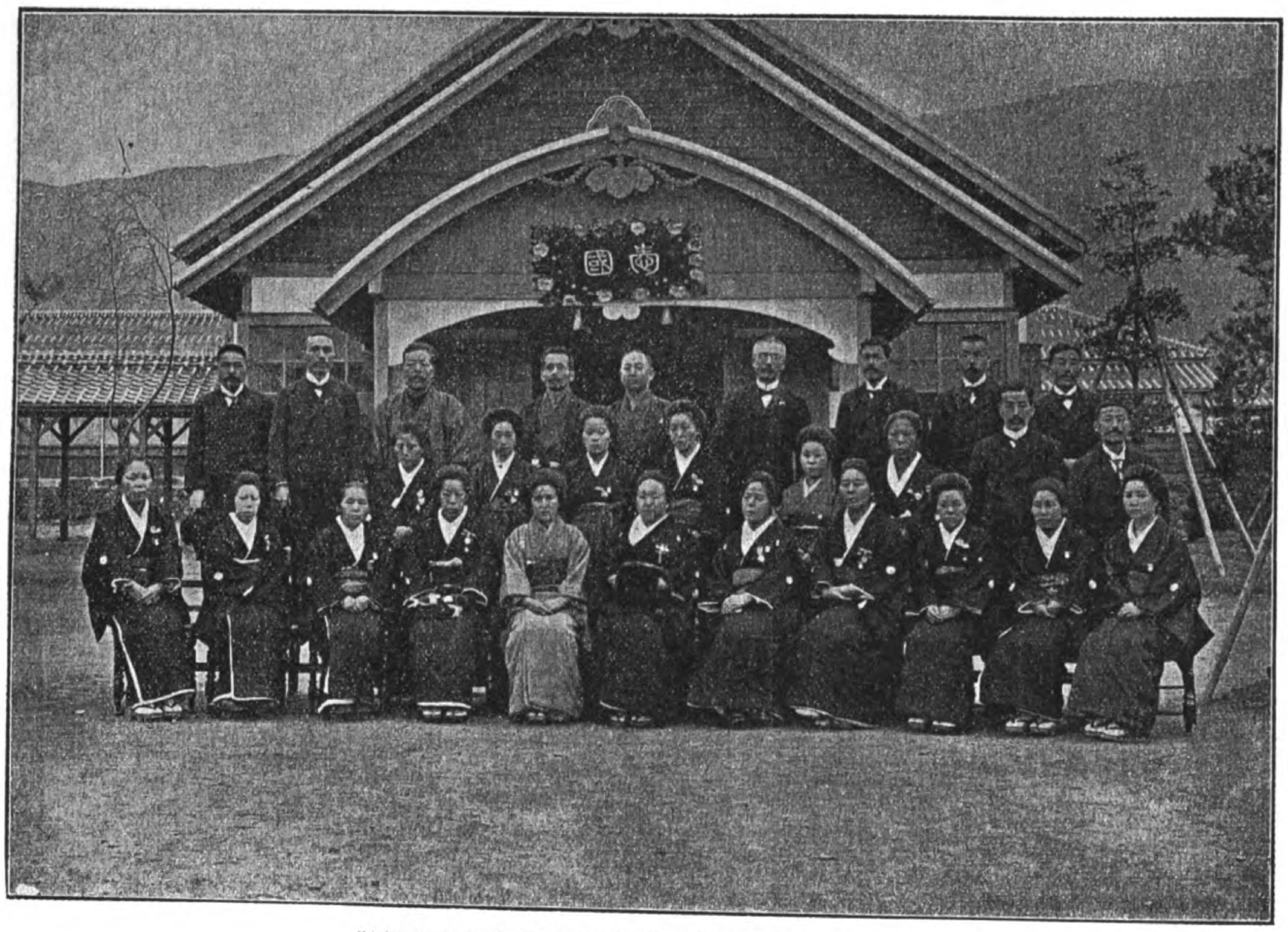
腦神經精神病科
病室新築 診療所
東京龜戸町 電話浪花二五五二
加命堂腦病院

院長診察月水金木前 松田醫學士診察火土前
病者施診火木前 入院診斷隨時應需 松田林兩副長は目下當院に在勤
電本八八八（病院用）八九八（私宅用）
東京神田區駿河臺鈴木町二（御茶水橋畔）
東洋内科醫院
院長 醫學士 髙田畊安
神奈川縣高座郡茅ヶ崎村（停車場所在）
南湖院

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明治四十二年五月廿日(毎月二回五日、廿日)發行　明治三十五年三月二十七日第三種郵便物認可

愛國婦人第百七十七號附錄



愛國婦人會愛媛支部宇摩幹事部總會紀念撮影
(說明本誌に在り)

發行兼印刷人山澤俊夫　編輯人永持徳一　發行所愛國婦人會内愛國婦人發行所　印刷所日清印刷株式會社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN